

高岡町埋蔵文化財調査報告書第34集

ひじ くろ
肱 畔 遺 跡

県営ふるさと農道緊急整備事業（小山田地区）に伴う
埋蔵文化財調査報告書 5

2005. 3

宮崎県高岡町教育委員会

ひじ くろ 肱 畔 遺 跡

県営ふるさと農道緊急整備事業（小山田地区）に伴う
埋蔵文化財調査報告書 5

2005. 3

宮崎県高岡町教育委員会

序 文

この報告書は、県営ふるさと農道緊急整備事業に伴い、平成14年度に実施した、耽畔遺跡における埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

この調査により、後期旧石器時代から古代にかけての遺構や遺物などが検出され、南九州の当時の歴史を解明するうえで多大な成果をあげることができました。

この発掘調査で明らかにされたものは、先人が残した私たちの文化遺産であり、これらの成果を活かすことが、我々に課せられた重大な責務と考えております。本書が町内に所在する文化財の保存に役され、また本町の学術資料として学校教育、社会教育などに幅広く活用頂ければ幸いに存じます。

尚、発掘調査を実施するにあたり、関係各所より頂いたご指導とご協力に対し、心から感謝を申し上げます。

平成17年3月

高岡町教育委員会

教育長 中山 芳教

例　　言

- 1 本書は、県営ふるさと農道緊急整備事業に伴い、2002年度（平成14年度）に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告である。
- 2 黒耀石及びサヌカイトの産地同定は薬科哲男氏（京都大学原子炉実験所）に依頼し、分析結果は本書「第Ⅲ章　自然科学分析」に掲載させていただいた。ただし、一部の姫島産黒耀石については、藤木の肉眼観察による判断とした。その他の石材については、その鑑定を宍戸章氏（南九州大学非常勤講師）に依頼した。
- 3 現場における測量・実測作業の一部は、(有)ジバング・サーベイに委託した。
- 4 石器の実測については、その一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、その他の石器の実測は藤木が行なった。土器の実測・拓本は、[REDACTED]（高岡町教育委員会）の協力を得て行なった。
- 5 肇畔遺跡の遺跡番号は338である。出土遺物は高岡町教育委員会に保管している。遺物の注記は、「遺跡番号—土層番号—遺物取上番号」を基本とし、収蔵番号については、「報告書シリーズ番号+報告者内遺物番号」としている。
- 6 本書の執筆及び編集は、藤木が行なった。

凡　　例

1. 遺物分布図中の遺物間の接合関係は結線で示した。石器は測量の順番を下記の要領で示した。
新しい剥離——→古い剥離
同時の剥離——||
2. 法量の単位はcm(最大長・最大幅・最大厚)とg(重量)である。
3. 石材分類は表7に示すとおりである。流紋岩・ホンワルスについては細分を行なっているが、石材の判定が困難であり、現在も調査中である。そのため、本文中では一括して表すとき、「流紋岩系」と表記した。

目 次

本文目次

第Ⅰ章	はじめ	7
第1節	調査に至る経過	7
第2節	遺跡の立地と周辺の環境	7
第Ⅱ章	調査	12
第1節	調査の概要	12
第2節	VI・VII・VIII層の調査	17
第3節	IV・V層の調査	25
第4節	III層の調査	33
第5節	II層の調査	38
第Ⅲ章	自然科学分析	41
第1節	牋畔遺跡出土の黒曜石、サスカイト製造物の原材料产地分析	41
第Ⅳ章	まとめ	58

挿図目次

第1図	遺跡分布図	9
第2図	遺跡周辺地形図	11
第3図	調査区位置図	13
第4図	上層実測図	15
第5図	VI・VII・VIII層出土遺物分布図	17
第6図	VI・VII・VIII層出土石器器種別拡大分布図	18
第7図	接合状況	18
第8図	VI・VII・VIII層出土石器材別拡大分布図	19
第9図	VI・VII・VIII層出土石器実測図(1)	20
第10図	VI・VII・VIII層出土石器実測図(2)	21
第11図	VI・VII・VIII層出土石器実測図(3)	22
第12図	VI・VII・VIII層出土石器実測図(4)	23
第13図	IV・V層遺構配置図	25
第14図	遺構実測図(1)	26
第15図	遺構実測図(2)	27
第16図	IV・V層出土土器分布図	29
第17図	IV・V層出土石器器種別分布図	30
第18図	IV・V層出土石器石材別分布図	30
第19図	IV・V層出土遺物実測図(1)	31

第20図	IV・V層出土遺物実測図(2)	32
第21図	III層縄文時代出土遺物分布図	33
第22図	III層出土縄文土器分布図	34
第23図	III層出土石器種別分布図	35
第24図	III層出土石器石材別分布図	35
第25図	III層出土遺物実測図(縄文時代)	36
第26図	III層古墳時代出土遺物分布図	37
第27図	III層出土遺物実測図(古墳時代)	37
第28図	II層出土遺物分布図	38
第29図	II層出土遺物実測図	38
第30図	黒曜石原材産地	43
第31図	サスカイト及びサスカイト様岩石の原産地	43

表 目 次

表1	VI・VII・VIII層出土石器内訳表	24
表2	VI・VII・VIII層出土礫属性表	24
表3	IV・V層出土石器内訳表	28
表4	集石遺構・IV・V層出土礫属性表	28
表5	III層出土上石器内訳表	34
表6	土器観察表	39
表7	石材分類表	39
表8	石器観察表	40
表9-1	各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	49
-2	黒曜石製造物群の元素比の平均値と標準偏差値	51
表10	九州西北地域原産地採取原石が各原石群に同定される割合の百分率(%)	48
表11-1	各サスカイト(安山岩)の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値	53
-2	原産地不明の組成の似たサスカイト(安山岩)製造物で作られた遺物群の元素比の平均値と標準偏差値	54
表12	耽跡遺跡出土黒曜石製石器及び安山岩(サスカイト)製遺物の元素比分析結果	56
表13	耽跡遺跡出土の黒曜石製遺物及び安山岩製遺物の原材产地推定結果	57
表14	報告書登録抄	67

図 版 目 次

図版1	遺跡遺景	61
図版2	土層断面、IV層出土状況、V層出土状況、VII層出土状況、1号土坑	62
図版3	2号土坑、4号土坑、3号土坑、1号集石、1号集石と2号集石	63
図版4	出土遺物	64
図版5	出土遺物	65
図版6	出土遺物	66

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経過

1 調査経緯

遺跡は、宮崎県東諸県郡高岡町大字小山山2287-2番地外に所在する。調査の契機は、まず、平成11年2月に文化財の有無についての問い合わせがあった。そして同年4月に、ふるさと農道建設に伴う仮設道の設置について、宮崎県中部農林振興局（以下県振興局）と町教育委員会とで、埋蔵文化財の取り扱いについての協議が行なわれた。その内で全体計画が示され、仮設道も含めて周知の遺跡にかかることから、路線内の分布調査を実施することとなった。5月に町教育委員会が宮崎県教育委員会文化課（以下県文化課）立ち会いのもと分布調査を行ない、さらに6月29日から7月15日で確認・試掘調査を行ない、8遺跡14箇所で遺跡の保存状況が良好であることがわかった。その結果をもとに7月末から8月にかけて県振興局、高岡町農村整備課、県文化課、町教育委員会とで協議を行なった。その結果、駆除調査を行なうこととなった。

調査期間は、平成14年4月18日～9月10日である。

2 調査組織

調査主体 高岡町教育委員会

調査	報告		
2002年度（平成14年度）	2004年度（平成16年度）		
教 育 長	中山 芳教	教 育 長	中山 芳教
社会教育課長	小岩崎 正	社会教育課長	小岩崎 正
文化財係長	島田 正浩	文化財係長	島田 正浩
主 事	廣田 晶子	主 事	藤木 晶子
嘱 託	松本安紀彦		

また、調査を実施するにあたり、地権者の方をはじめ関係各位のご理解とご協力を頂いた。また、発掘調査から整理報告に至るまで、福田泰典（宮崎県埋蔵文化財センター）、利田理啓（宮崎県文化課）のご指導・ご助言を得ている。記して深謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

第2節 遺跡の立地と周辺の環境

1 地形的環境

高岡町は山林が70%以上を占める。その町中央を蛇行しながら大淀川が東流し、それによって形成された河岸段丘からその東側に広がる宮崎平野を一望できる。この大淀川に起因する自然環境が大きく人々の生活を左右していたことはいうまでもなく、しかるに歴史的要因にも導かれていた。高岡町の地形について合原敏幸¹¹は「高岡町南部の高岡山地中央部及び東部には白亜紀の四万十累層群に属す

る砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、一部玄武岩、凝灰岩などの塩基性岩類が含まれる。内之八重付近の砂岩頁岩互層中には塩基性岩類に作って、厚さ1m~2mのチャートが見られる。高岡山地西部には、古第三紀の四十万累層群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、高岡山地を南北に横切る高岡断層によって前述の白堀層の層に接している。高岡町の中心部付近及び高岡山地北部には、新第三紀の宮崎層群に属する砂岩、泥岩、砂岩泥岩互層が広い範囲で分布している。本層は四十万累層群を傾斜不整合の覆う海成層で、貝、カニ、ウニ等の化石を含む。さらに、町中心部付近に及び西部は宮崎層群を不整合に覆い第四紀の礫、砂、及び粘土からなる段丘堆積物、主にシラスからなる姶良噴出物、及び主に礫、砂シルトからなる沖積層がみられる。段丘堆積物、姶良火山噴出物は急傾斜とその上の広い平坦面や緩斜面から形成される台地状の地形を有している。沖積層は、大淀川、浦之名川、内山川、飯田川等の河川流域沿いに分布している。(高岡町埋蔵文化財調査報告書12集より抜粋)としている。

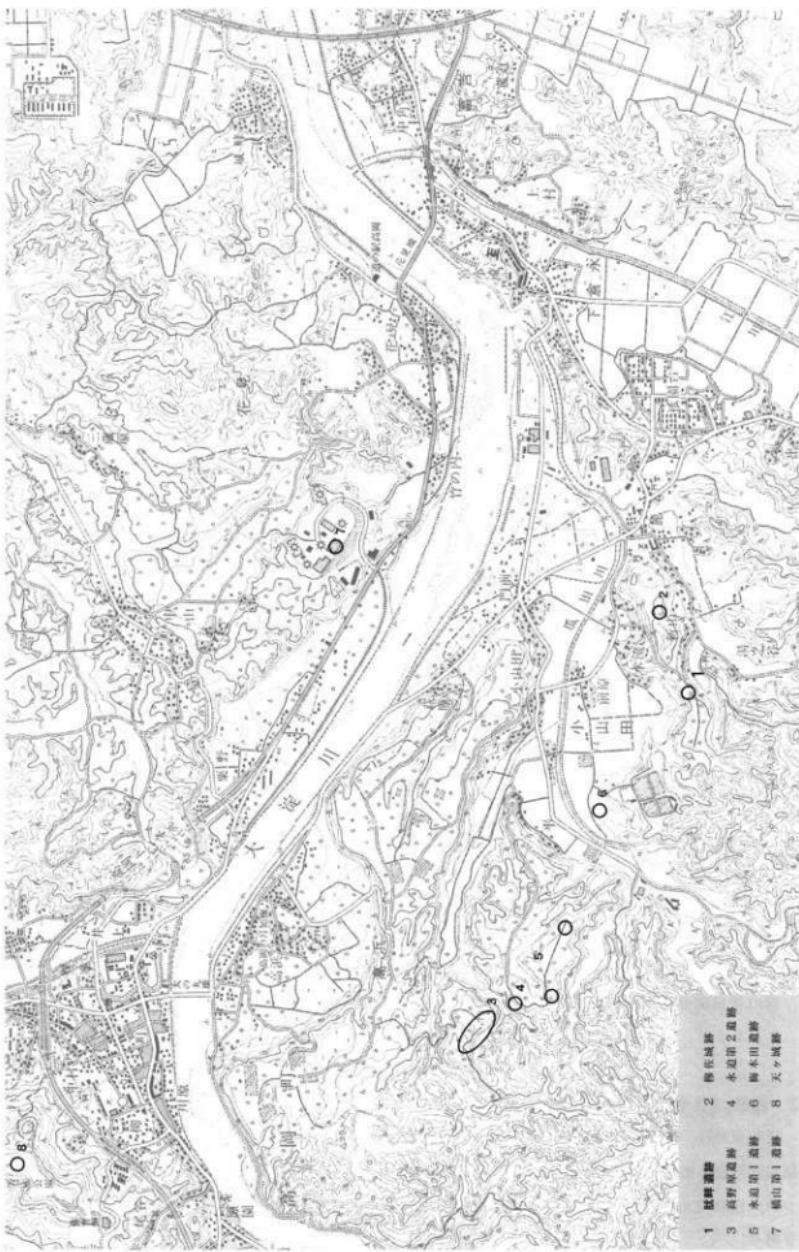
(1) 高岡町後堀編

2 歴史的環境

旧石器時代 遺跡の多くは台地あるいは河岸段丘上で確認されている。町内最古の遺跡は、小山田・高浜地区の一連の河岸段丘状で確認されている。高野原遺跡第4地点と永迫第1遺跡、永迫第2遺跡である。高野原遺跡では、9層(姶良Tn火山灰下位)から、接合資料、スクレイバーや石核など含む石器群と、日東産黒耀石製ラウンドスクレイバー1点からなる石器群とが出土した。永迫第1遺跡ではナイフ形石器製作ブロックが検出された。姶良Tn火山灰上位の遺跡は、向屋敷遺跡で砾群(報告原文では集石遺構)とともにナイフ形石器やスクレイバーが出土した。高野原遺跡第1・2地点でも、層位的に不安定ながらナイフ形石器、スクレイバーといった遺物の出土がある。永迫第1遺跡では剥片尖頭器が出土している。また、野尻町に近い一里山地区では、剥片尖頭器が採集されたほか、小山元第2遺跡で、姶良Tn火山灰直上から細石刃文化期までの4時期の旧石器文化層が確認され、高岡町内における旧石器時代編年作業にとっても重要な資料となった。久木野遺跡第8地点では、ナイフ形石器、台形石器群が3文化層確認された。

縄文時代 草創期資料は、茶屋原遺跡で爪形文土器が出土したのみである。早期の発掘調査例は多く、天ヶ城跡、宗栄司、久木野(1区~4区)、橋山第1、橋上、八久保第2、根原、中原、泊野、高野原、永迫第1、永迫第2の各遺跡が挙げられる。土器の様相をみると、天ヶ城跡では、押型文土器と桑ノ丸式土器が大半を占め、その両者の折衷土器も出土している。橋山第1遺跡は、前平、吉山、下利峰、桑ノ丸、平格、塞ノ神、苦浜、押型文等の各型式の土器が出土した。また、永迫第2遺跡ではアカホヤ火山灰下位から弦状耳飾が出土した。水道第1遺跡では帖地型石器製作ブロックが確認された。各遺跡の遺構は、集石遺構や陥入穴状遺構が中心で掘り込みや柱穴をもつ住居は現時点では検出していない。前期は久木野遺跡第1区、永迫第2遺跡などで確認されている。中期は同じく久木野遺跡で春日、大平、岩崎下層の各型式のものが出土している。後期は泊野遺跡で阿高系・岩崎下層式、綾式土器などが出土した。橋山第1遺跡では阿高系の土器や疑似縄文の土器が出土した。さらに久木野遺跡では円形堅穴住居跡とともに北久根山式が出土している。城ヶ峰遺跡では市来式や北久根山式が出土した。山子遺跡、赤木遺跡等でも該期資料が若干採集されている。晚期は黒色磨研土器が学頭遺跡から出土している。

第1図 遺跡分布図



弥生時代 後期資料の調査例が多く、前～中期の調査例は少ない。標高15m程の微高地状のところに位置する学頭遺跡からは、断面V字状を呈する溝状遺構や竪穴住居跡が検出された。舌状の丘陵先端部の位置する的野遺跡では、後期の土壙墓が検出された。

古墳時代 集落遺跡の調査は八児遺跡や高岡麓遺跡第5地点がある。高岡麓遺跡では2軒の竪穴住居跡が検出され5世紀中頃に比定されている。また、八児遺跡は側壁にカマドが付設された竪穴住居跡（7世紀代）などが12軒以上検出された。両遺跡とも標高がほぼ同じで大淀川の氾濫源である低地に位置しており、該期集落の一端をみることが出来る。次に、墳墓遺跡の調査は久木野地下式横穴墓群がある。これまで4基の調査がおこなわれ、人骨とともに鉄斧や玉類が出土し6世紀前半をしている。また、町内には3基の円墳（県指定古墳）がある。その古墳付近で、耕作中に発見が2点と鉄製品が発見されている。

古代 高岡周辺は淨平年間（931～938年）の和名抄によると、その当時は「穆佐郷」といわれていた。それより遅る時代の遺跡が最近の調査で確認されている。一つは蕨野遺跡で、大淀川北岸の丘陵（大字花見）に位置し、9世紀後半の土師器の椀、皿などを生産した焼成遺構が6基以上検出された。三生江遺跡や的野遺跡からは同時期の越州窯系青磁碗や綠釉陶器などが出土している。また、宗栄寺遺跡や二反野遺跡で土師器碗が出土している。古代の墳墓としては、八児遺跡から胡洲鏡、鉢、石鍋等を副葬した土壙墓が検出されている。

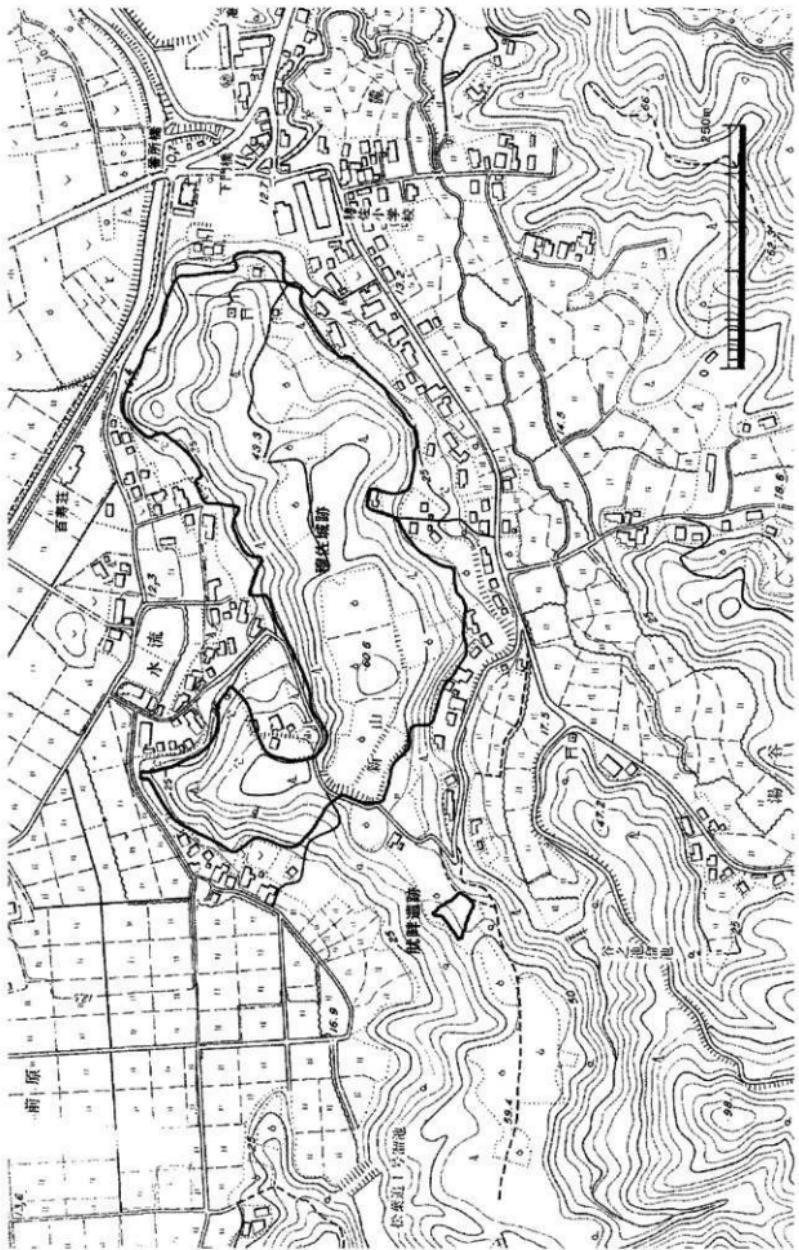
中世 建久四年帳によると高岡は、12世紀には「島津庄穆佐院」といわれていた。その後、南北朝期を経て、島津氏と伊東氏の対立を迎える。その中心となったのが穆佐城である。穆佐城は足利尊氏が九州の拠点としたことからはじまる。その後、島津久豊・忠國の居城、そして伊東氏48城のひとつとなっていく。平成3年には穆佐城の縄張り調査を実施し、その成果として、南九州特有の特徴をもつとともに機能分化のみられる山城であることがわかった。そのような中で、穆佐城周辺の大淀川沿いにも小規模な山城が点在し、戦国時代から近世へと移っていく。

近世 中世までは高岡の中心地は穆佐城周辺だったのに対して江戸の時期になると犬ヶ城周辺に一変する。鹿児島藩は、天ヶ城と穆佐城の嵩地に多くの郷士を移住させ籠を形成させた。そして、綾、倉岡とともに外四ヶ郷として、特に高岡郷はその中心として鹿児島藩の東方の防衛の要として発展する。高岡の地頭仮屋を中心に広がる高岡麓遺跡は、計画的な街路設計がなされ、郷士屋敷群と町屋群に分割されている。調査はすでに12箇所以上で実施され、町屋を調査した第1地点では大火跡と思われる焼上層の下から素掘の井戸や土坑を検出した。さらに、第5地点では郷士屋敷群の一角を調査し建物跡や陶磁器類を検出し、第8地点では武家門の下部構造を明らかにした。既刊の近世期の発掘調査は高岡麓遺跡だけに留まっているが、道路脇などの石塔類からも当時の状況を知ることができる。

3 遺跡の立地

耽畔遺跡は、国指定史跡穆佐城跡と同一の丘陵上にある。丘陵は西から東に向けて張り出し、耽畔遺跡付近で最も幅が狭くなり、ここから東側に再び広がったところから丘陵先端までが、穆佐城跡である。シラス丘陵であり、南北の斜面は急角度で平野部に至る。遺跡の標高は41～44mで平野部とは約30mを測る。

第2图 道路网地形图 ($S=1/5,000$)



第II章 調査

第1節 調査の概要

1 調査の方法

肱畔遺跡は、国指定史跡穆佐城跡の立地する丘陵上の西側に位置する。穆佐城跡は、中世の大規模な山城である。そのため今回肱畔遺跡を調査するにあたり、穆佐城跡関連遺構が周囲に存在する可能性も考慮に入れて行なった。まず、遺跡周辺の詳細な地形測量を行なうとともに(第3図)、人工的に作られた急斜面や区画がないかどうかを確認した。その結果、遺跡の南側と北側にある急斜面についてはシラスに起因する自然地形である可能性が高いことがわかった。調査区内は、北側に一段の微高地部を持ち、南西側は緩やかに傾斜する平坦面である。北側の微高地部は中世山城関連遺構の可能性が考えられた。また、調査地は、最近まで蜜柑園として利用されており、現地形は、蜜柑園を造る際に造成された可能性もある。そのため調査は、段差部分を貫るトレンチを設定し、上層の確認から始めた。その後の調査は、層位の発掘調査に切り替えた。魔土置き場が周辺で確保できなかったため、調査区を2分して行なった。大規模な擾乱、火山灰層は重機にて除去した。

遺構の実測は1/10の遺構実測と測量システムを併用した。遺物の取り上げは測量システムを用いた。

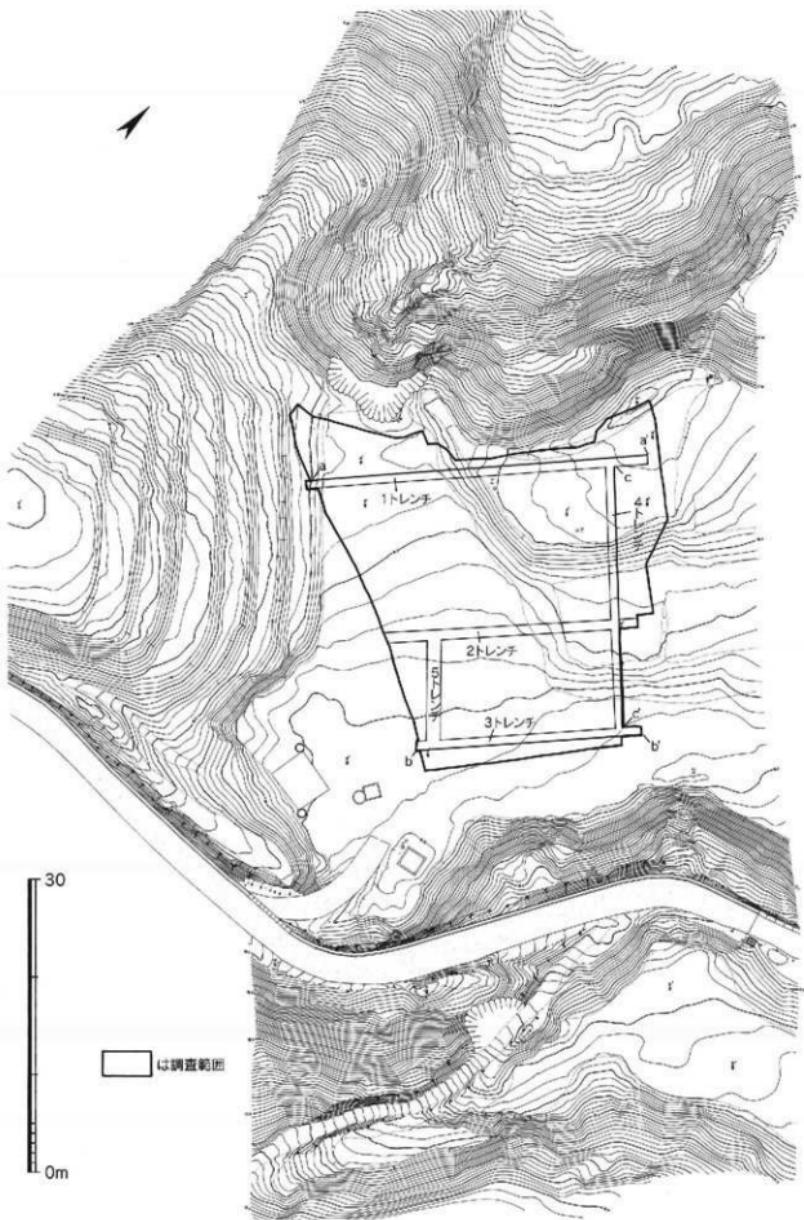
2 調査の経過

蜜柑伐根の後、1トレンチを入れたところ、旧地形と現地形にはかなり差があることがわかった。重機によって一部の表土を除去したのち、調査区全体を把握するために、2、3、4、5トレンチを設定した。旧地形は東から西に向かって傾斜し、西側には小さな谷部がある。かつ北から南へ緩やかに傾斜する地形であることが判明した。微高地部と平坦部との境の斜面一帯に近世陶磁器の出土する大規模な掘り込み(抉り)が確認されたが、ガラスやプラスチックが共伴したこと、近現代の造成と判明した。さらに、4トレンチでは近現代の所産と考えられる大きな落ち込みが確認された。また、2トレンチ東半部は造成による削平で地山となる一次堆積のシラスが確認された。のことから、遺跡の旧地形は、近現代の造成によりかなり損なわれており、そのために中世の山城に関連する遺構等は、その有無を確認できないことが確認された。今後の調査は、これらの造成・削平部分を調査対象から除き、北側微高地部と西～南側の平坦部に限られることとなった。施工現場の関係から、調査区を2トレンチを境に2分し、北西部の調査から行なった。第3図の上半部が北西部、下半部が南東部にあたる。

北西部の調査 北側微高地部と西側平坦部に分けられる。

西側平坦部は、Ⅲb層では1トレンチ付近で片岩・チップが数十点と、砾が集中して出土した。その他の地点では、遺物の出土は極めて少なく、Ⅲb層の出土のない部分とⅢc層は重機により掘削した。

微高地部縁辺Ⅳb層上位で集石遺構検出。中1基、小1基。旧地形は北から南へ向かうなどらかな傾斜地であったと考えられ、集石の南側にも遺構が存在した可能性は高い。統いて2・3・4号土坑が検出される。2・3号土坑は包含層が残っていないため、層位的な時期決定は困難。出土遺物や埋土の観察から早期の所産である可能性が高い。Ⅴb層上面で空中写真撮影を行なった。



第3図 調査区位置図

空撮後、急斜面となった西側平坦部はVb層上面で全面調査からトレンチ調査に切り替える。1トレンチを拡張し、土層の堆積状況の確認と、遺物の出土状況を記録する。遺物がVI層で若干出土したのみで、その他の遺物は確認されなかった。上層の撮影・実測を行ない、調査を終了した。

北側微高地部はVI層上面で陥穴状遺構を1基検出(1号土坑)。埋土は小林軽石混じりの黒色ブロックを含む。VI層、VII層を全面掘削し、遺物出土状況写真撮影、測量を行なった。遺構は検出されず。VII層は4トレンチ西を3m幅で掘削し、石器が出土したため、写真撮影、測量を行ない、調査を終了した。
南東部の調査 表土からIIb層までは重機で除去した。その後IIc層、IId層掘削。古代の遺物が出土。IIIa層で縄文晚期土器出土。IV層掘削、この面で空中写真撮影実施。V層は当初の出土遺物が僅かであったため、トレンチ調査に切り替えたが、礫が多出し、全面調査に移行。VIa層でも多量の礫出土。測量、写真撮影を行ない、調査を終了。

9月10日、すべての埋め戻しを完了した。

3 遺跡の基本層序

基本層序は次の通りである。

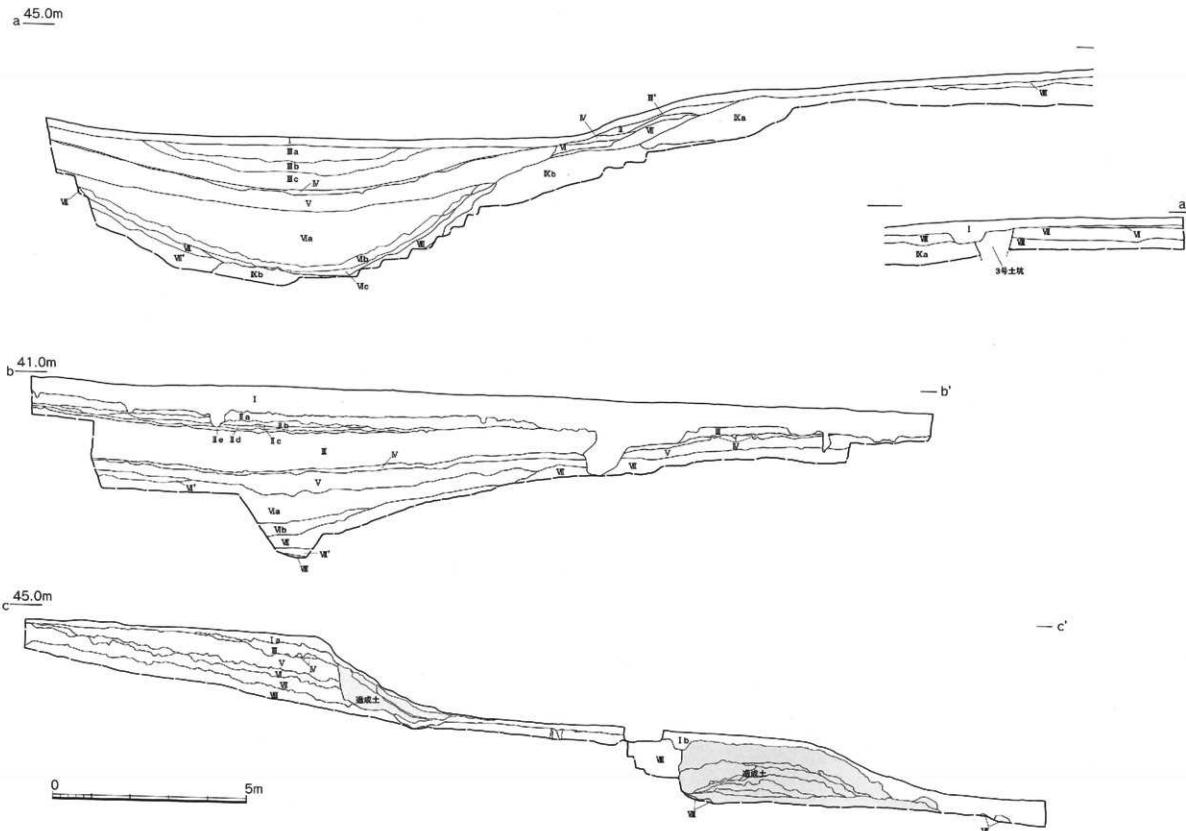
I・表土(a:現耕作土,b:旧表土)。 II・黒褐色土(a:小礫少含む,b:小礫多く含む,c:dよりソフト,d:小礫非常に多く含む,e:III層との漸移層)。 IIc-d層に古代の遺物が包含される。 III・アカホヤ火山灰層(a:やや黒く濁る二次堆積層,b:締まりのある二次堆積層,c:一次堆積層)。南東部はIII層のアカホヤ火山灰が約1mの厚さで堆積していた。一次堆積層は重機で除去。 IV・霧島牛のすねローム層。縄文早期の遺物が包含される。 V・褐色土層。縄文早期の遺物が包含される。 VI・小林軽石混土層(a:極暗褐色土,b:黄褐色土,c:小林軽石多く含む)。谷部で石器が若干出土。 VI'・VI層に小礫含む。 VII・明褐色粘質土層。旧石器の遺物が包含される。 VII'・VII層に小礫含む。 VIII・始良Tn火山灰層。漸移層も含む。漸移層に旧石器の遺物が包含される。 IX・始良入Tn火碎流(a:ソフト,b:締まりあり)。地山である。

小礫を含む層が南西の谷部で確認されたが、小礫の多くは3~5cmの完形円錐である。これらの小礫は、遺跡南西側の斜面で確認できることから、自然転石とし、整理作業段階で遺物から除いた。

4 主な遺構と遺物

既往調査では、後期旧石器前半から古代までの文化層が確認された。このほか、櫻井坑や表土から中世及び近現代の遺物が出土している。大半は近世・近現代の所産で、中世の遺物は僅かである。

時期	関連火山灰	遺構	遺物
古代(II層)			土師器皿
古墳(III層)			土師器甕
縄文後期・晩期(IV層)	アカホヤ火山灰		黒色磨研土器、打製石器、石匙
縄文早期 (V-VI層)	牛のすねローム	集石遺構2基 土坑4基	轟1・鎌石橋式土器、打製石器 帖地型石器、石匙、スケレバー
後期旧石器後半 (VI-VII-VIII層)	小林軽石 始良Tn火山灰		ナイフ形石器、スケレバー、 接合資料



第4図 土層実測図

第2節 VI・VII・VIII層の調査

VI層小林輝石混土層からVIII層始良Tn火山灰層までである。後期旧石器時代後半期に該当する。

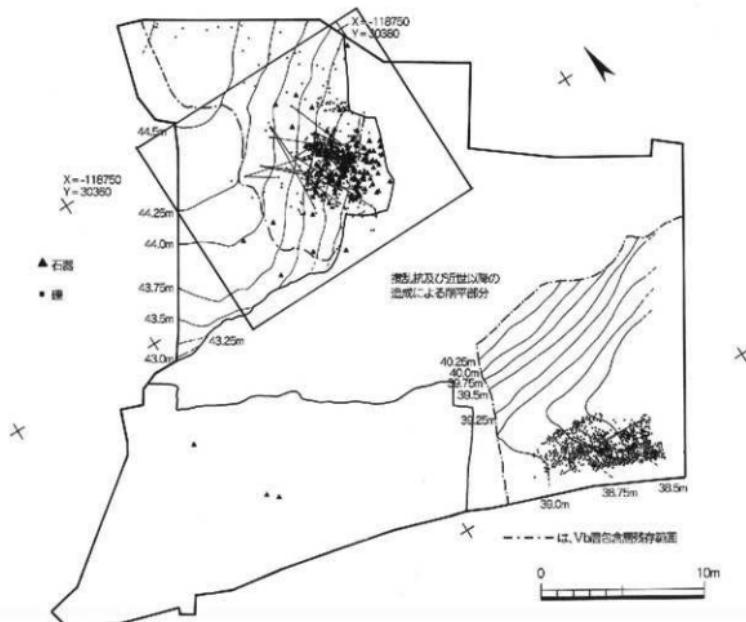
石器の分布は、VII・VIII層を中心に北側斜面でまとまって出土した。南側の斜面でVI層の遺物が若干出土している。VI層10点、VII層38点、VIII層115点の合計163点が出土した。すべての層位間で接合関係が確認された。特にVII・VIII層間では頻繁に認められたことから同一文化層と考えられる。VI層は遺物量が非常に少なく、また、接合関係から下層遺物の混入も考えられ、文化層の設定は困難である。

散跡

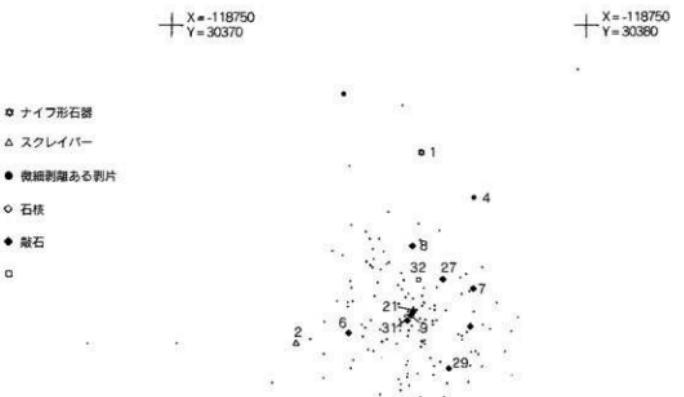
疎は、VII・VIII層は調査区北側の斜面で、VI層は南側の谷部で主に出土している。全体で2,011点出土し、総重量は198.151gである。このうち、95%以上が砂岩である。重量別出土状況を見ると、50g以下が最も多く、200g以下で全体の90%を超える。2kg以上の疎は2点である。95%以上の疎が程度の差はあるが赤化が認められた。完形疎は140点であった。接合作業はVI層とVII・VIII層とで分けて行なった。

石器

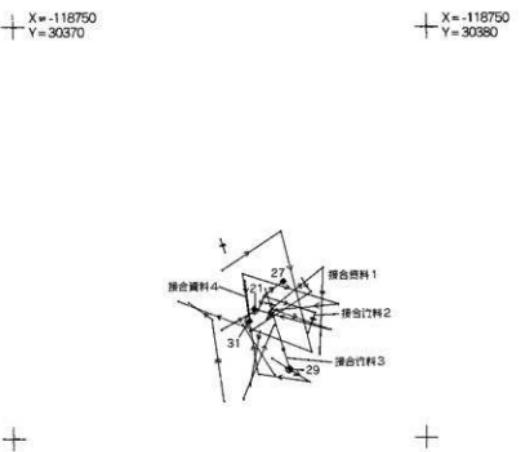
器種構成は、ナイフ形石器1点、スクレイパー1点、搔器1点、微細剥離ある剥片3点、剥片・チップ147点、石核9点、敲石1点である。石材別にみると、流紋岩系155点、肥薩系黒曜石3点、黒曜石チップ1点(产地分析不能)、チャート2点、砂岩2点である。黒曜石及びチャートは剥片のみであった。



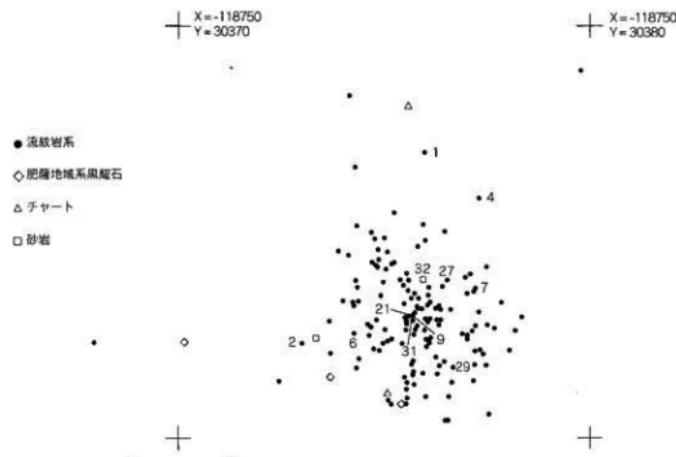
第5図 VI・VII・VIII層出土遺物分布図



第6図 VI・VII・VIII層出土石器種別拡大分布図



第7図 接合状況



第8図 VI・VII・VIII層出土石器石材別拡大分布図

流紋岩系製品

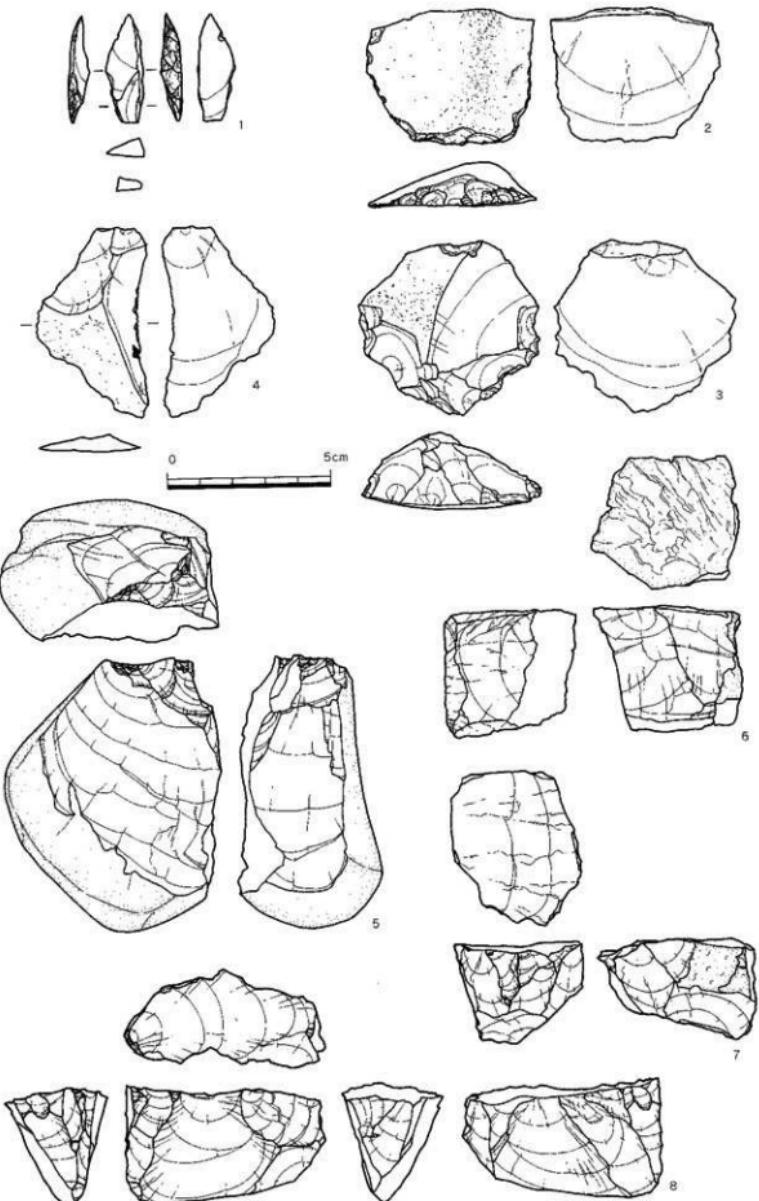
1は、剥片を縱位に利用した、二側縁加工のナイフ形石器である。左側面は腹面から背面に調整剥離が施される。右側面は、腹面及び、背面から調整剥離が施される。

2・3はスクレイパーである。2は下縁部に腹面からの二次加工が施される。両側縁部には微細剥離が認められる。3は肉厚な剥片を縱位に利用。腹面から背面に向けておおざっぱな二次加工が施される。

4は微細剥離ある剥片である。縱長剥片の右側縁部に微細剥離が認められる。

5～9は石核である。5はこぶし大のやや扁平な礫を素材とする。まず、上面に打面が作出され、右側面で縱長剥片が剥離される。その後、表面に大型の縱長剥片が剥離され、表面右方に細かい剥離が加えられる。左側縁、裏面、下面は礫面である。7は擦理によって直角に割れた素材からの剥片剥離である。上面に打面を設定し、右側面、表面、左側面に連続的に剥離が施される。裏面は礫面である。6は7と同じ石材で、四角形を呈する石核である。上面と右側縁は礫面である。7の剥片剥離が施される前段階と考えられる。8は石核左側面からの剥離によって打面が作出され、全面に剥片剥離が施される。船野型細石刃核プランクの可能性を考えられる。9は上面を打面として剥片剥離が行われる。作業面は表面のみである。裏面は礫面。

〈接合資料〉 接合資料は41点12個体が確認された。そのうち石核を含む資料が1個体、ほかはすべて剥片の接合であった。



第9図 VI・VII・VIII層出土石器実測図(1)

以下は石核を含む接合資料である。

接合資料 1

剥片11点と石核(21)の接合資料である。剥片剥離は3工程に分けることができる。

1工程 石核下面から剥離を施す。

10のみである。

2工程 石核上面の摺理面を打面にして右側面を連続的に剥離。

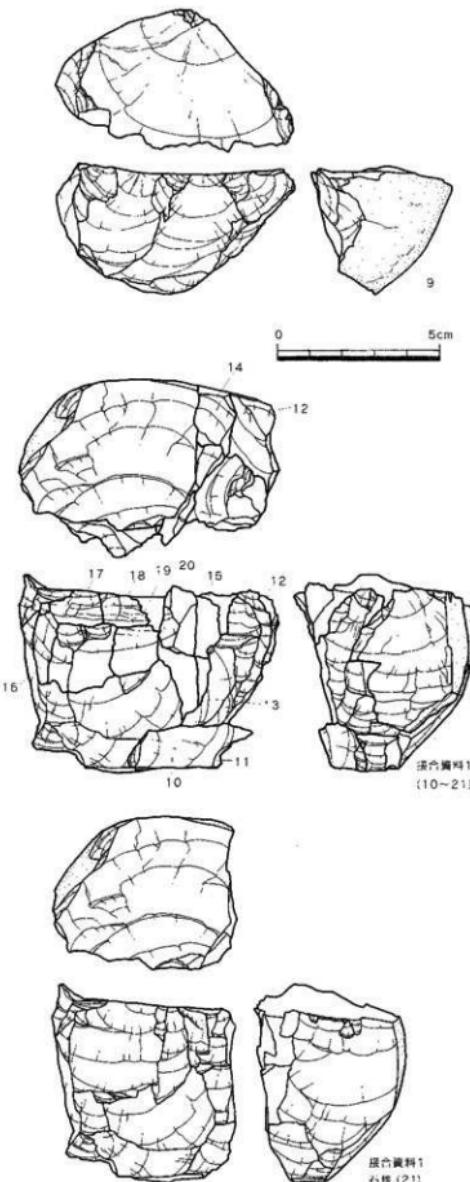
11・12・13→14→15の順に剥離される。11は打点折損。

3工程 2工程と同様、石核上面が打面。作業面を表面に切り替えて剥片剥離。16→17+18+19→20の順に剥離される。

打面は、10の下面のもの以外はすべて上面に設定される。剥片は、摺理の影響で寸詰まりのものや、肉厚のものが多い。石核(21)は、上面及び下面に摺理面を有する。裏面には礫面が残り、剥離途中で剥片剥出を放棄した可能性も考えられる。

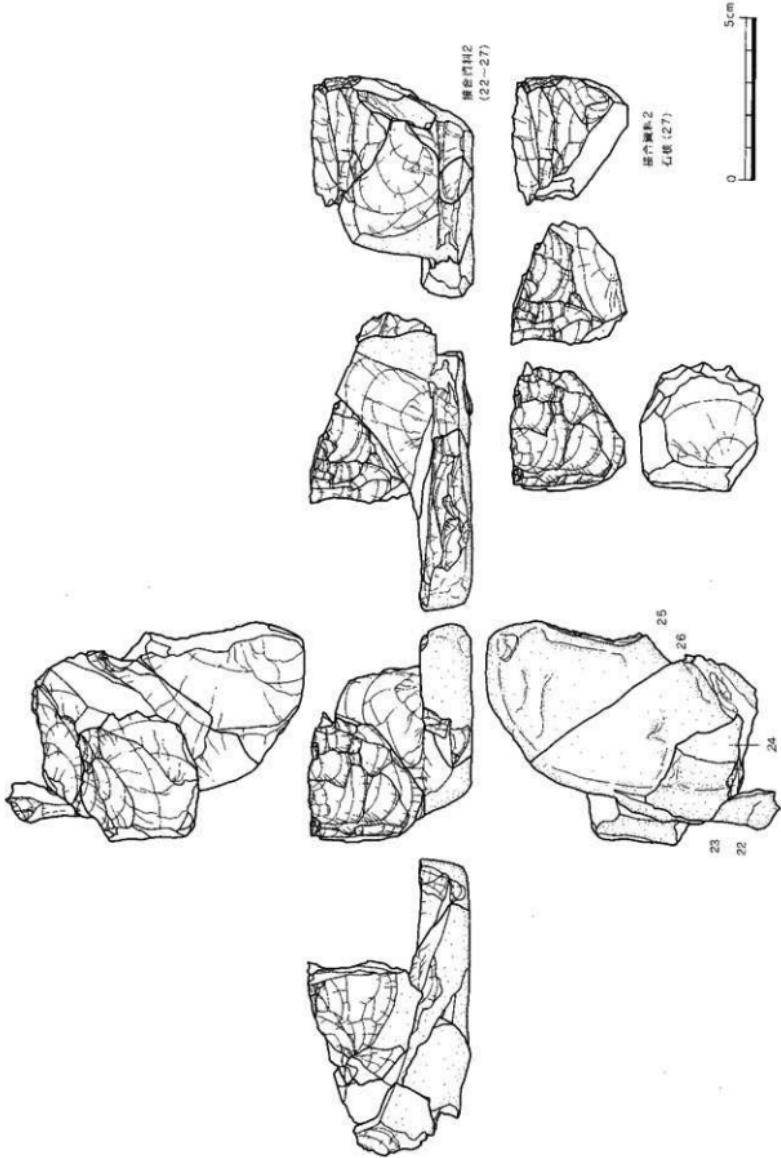
接合資料 2

石核と剥片の接合資料である。まず、石核(27)とそれ以外の石器に2分割されている。前者27の石核は、打面を左側面→下面と転移しながら、剥離が行われる。その後、表面及び右側縁を作業面とし、上面から小堅の縱長剥片を連側的に剥出している。後者は、25+26が剥片素材石核となり前面左側面から22(剥片)→23(剥片)+24(剥片)が剥離される。摺理のため、剥片は不定形のを呈する。

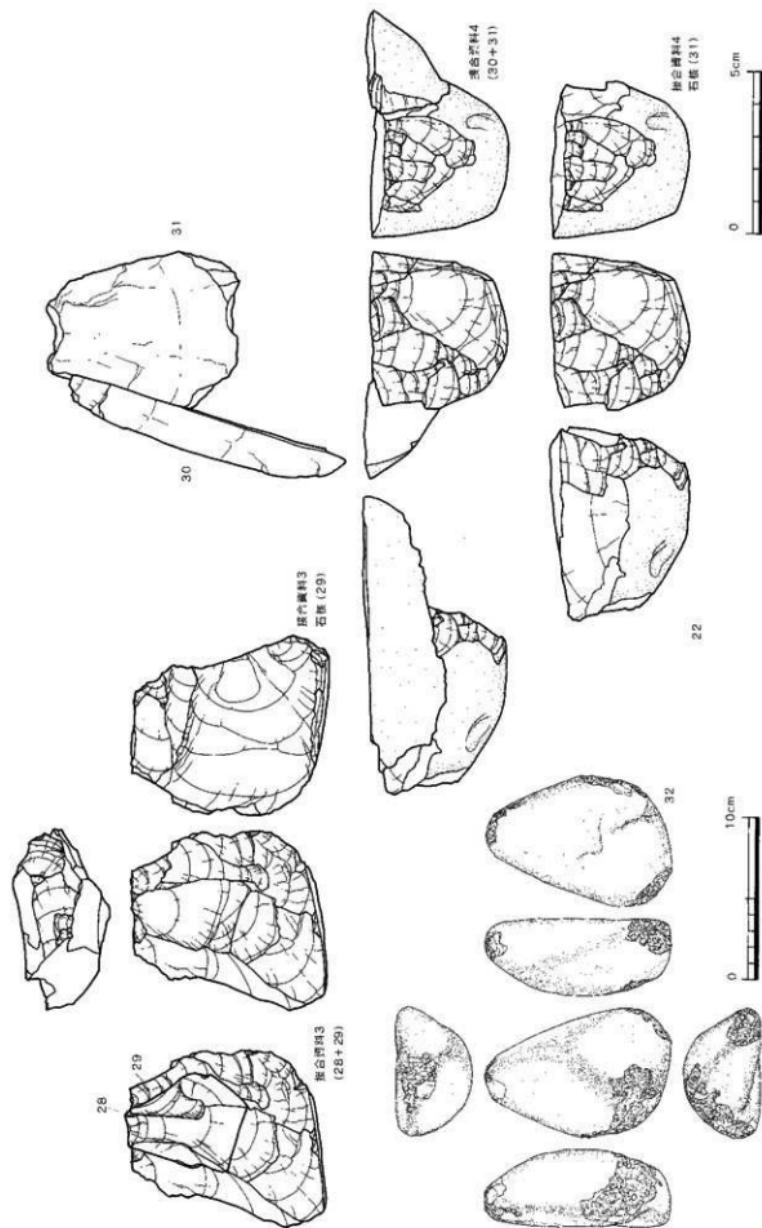


第10図 VI・VII・VIII層出土石器実測図(2)

第111圖 VI・VII・VIII層出土石器實測圖(3)



第12圖 VI·VII·VIII層出土石器實測圖(4)



接合資料3

剥片(28)と石核(29)の接合資料である。石核は下面に疊面が残存する。打面転移を頻繁に繰り返し、剥片剥離を行っている。4工程に分けることができる。

1工程 石核上面を打面に設定し表面及び左側面を作業面とした縦長剥片剥離。

2工程 石核左側面を打面とし石核上面から裏面にかけてを作業面とした剥片剥離。

3工程 28を含む石核上面を打面とした剥離。

4工程 石核裏面を打面とした右側縁部の剥片剥離。

接合資料4

剥片(30)と石核(31)の接合資料である。摺理面によって接合。31の石核は上面が摺理面、側縁部及び下面が疊面である。上面を打面に設定し表面と裏面に連続した剥片剥離が認められる。

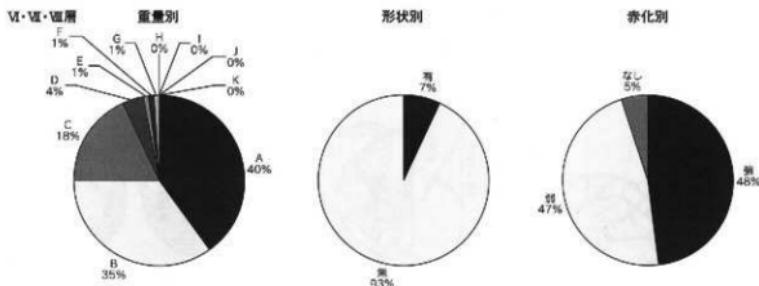
砂岩製品

32は敲石である。上面、左側面、下面及び右側縁下部に敲打痕が残る。最大長11.5cm、最大幅8cm、最大厚4.75cm、重量496gである。

表1 VI・VII・VIII層出土石器内訳表

	ナイ フ形 石器	微細剥 離ある 剥片	剥片 ・ チップ	石核	敲石	スク レイ バー	摺器	合計
流紋岩系	1	3	140	9		1	1	155
肥薩地域系黒耀石			3					3
未分析黒耀石			1					1
チャート			2					2
砂岩			1		1			2
合計	1	3	147	9	1	1	1	163

表2 VI・VII・VIII層出土疊属性表



疊重量 A..~50g, B..51~100g, C..101~200g, D..201~300g, E..301~400g, F..401~500g, G..501~750g, H..751~1,000g, I..1,001~1,500g, J..1,501~2,000g, K..2,000g~

第3節 IV・V層の調査

IV層牛のすねローム層とV層褐色土層を対象とし、文化層は純文時代早期相当である。場所によって堆積状況が異なるが、IVa,b,Va,b,c層に細分して遺物取り上げを行なった。

分布状況

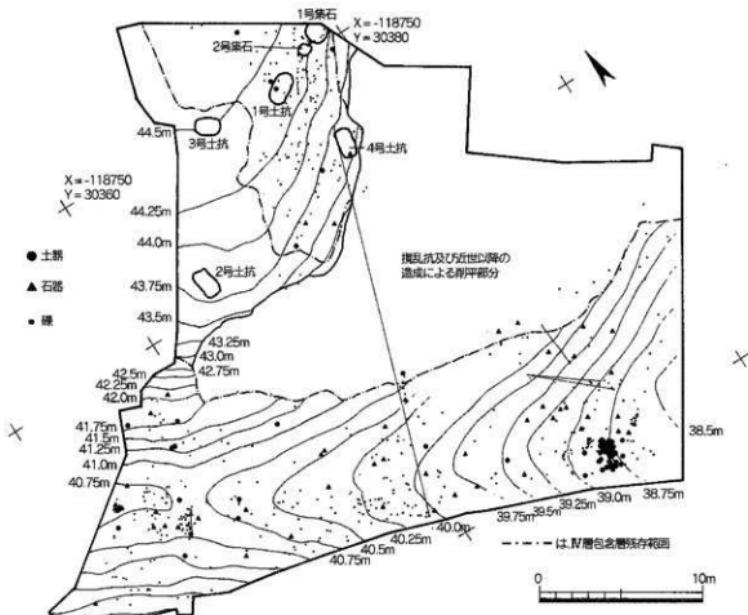
土器は、小片を含めると調査区全面から出土している。型式の推定できる資料は、調査区南側で、主にIVa層から出土している。

石器は、平面分布は、調査区南側でやや多く出土した。垂直分布を見ると、各層位からまんべんなく確認された。产地分析実施分については、肥薩地域系黒曜石がVb層から、西北九州産黒曜石がIVb、IV層から、姫島産黒曜石がIVa、IV、Vb層から、多久産サスカイトはIVa、IV、Vbの各層から、金山産サスカイトはVb層から出土している。

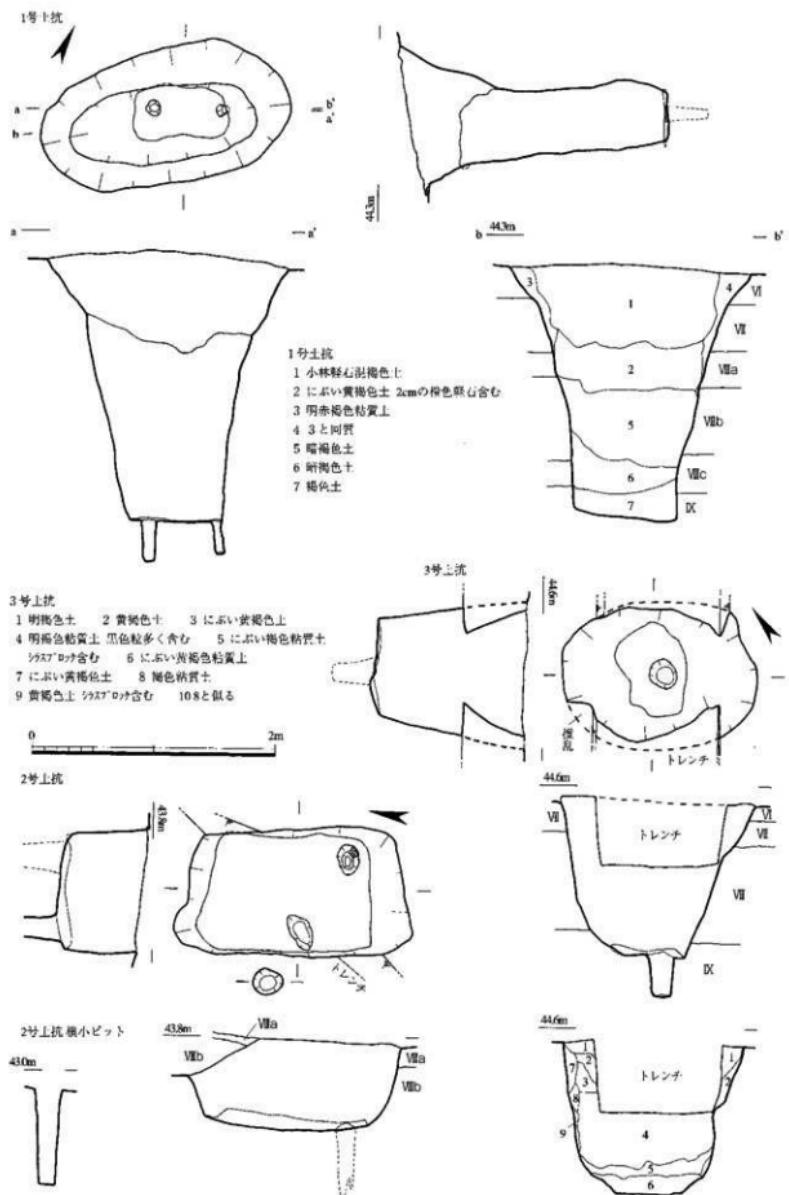
磚は調査区全面から出土した。

文化層

土器はIVa層に中心が見られ、1文化層と考えることができる。石器はIVa層からVc層まで確認されており、細分される可能性が高い。36の粘地型石鐵は、35の土器と平面分布では非常に近い位置で出土しているが、垂直分布を見ると、IVa層とVb層から出土しており、30cmの高低差がある。そのため、35の土器よりも古い所産であると考えられ、少なくとも2つの文化層が存在すると想定される。



第13図 IV・V層遺構配図



第14図 遺構実測図(1)

遺構

土坑4基、集石遺構2基が確認された。すべての遺構は北側の微高地部で検出された。

1号土坑

VI層上面で検出された。平面形状は長軸2m、短軸1.3mの長楕円形を呈する。床面は長軸0.8m、短軸0.5mの長方形を呈し、長軸上に小ピットを2つ有する。ピットの深さは30cm前後である。土坑の残深は2mで、90~75度の角度で立ちあがり、上部はラッパ状に開く。

2号土坑

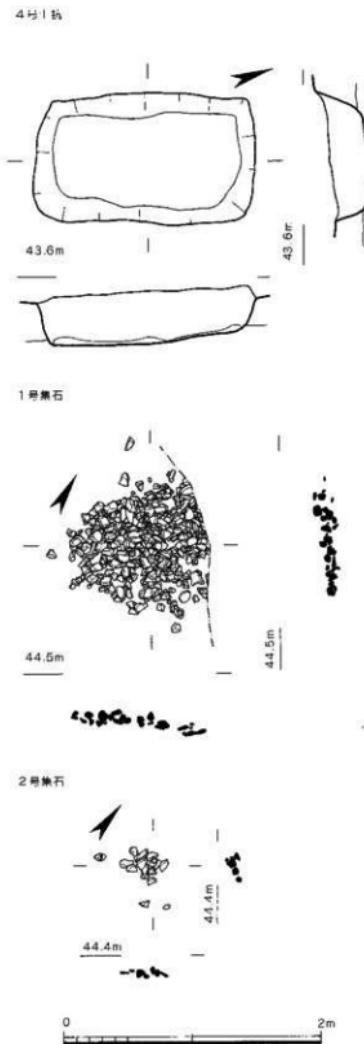
VII層上面で検出されたが、II~VII層が存在しないため、実際の掘り込み面は、上位にあったと考えられる。土坑の平面形状は、長軸2m、短軸1mの長方形を呈する。床面は長軸1.9m、短軸1mの長方形を呈し、小ピットを2つ有する。ピットの深さは60cmと深い。土坑の残深は0.7mで、短軸方向へはほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向へはやや丸みを帯びて立ち上がる。土坑から縄文土器が出土した(第19図33)。早期末葉相当の苦浜式土器である。出土位置は埋土中位で、土坑に伴うものかどうかは不明。

3号土坑

VI層上面で検出された。II~V層が存在しないため、本来の掘り込み面は不明である。平面形状は長軸1.6m、短軸1.1m以上の楕円形を呈する。床面形状は、長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形で中央に小ピットを1つ有する。ピットの深さは30cm程度である。土坑の残深は1.3mで、80~70度の角度で立ち上がる。埋土は、明褐色粘質土などの粘質土が堆積し、肉眼観察ではアカホヤ火山灰は確認できなかった。時期決定の根拠は乏しいが、早期以前の可能性が高い。

4号土坑

Nb層上面で検出された。平面形状は長方形で、長軸1.7m、短軸1.0mを測る。床面は長軸1.4m、短軸0.8mである。床面は緩やかな傾斜で北方向へあがっている。土坑の残深は0.5mで、約65度の角度で立ち上がる。



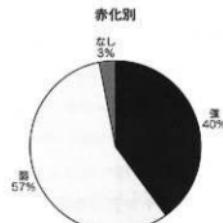
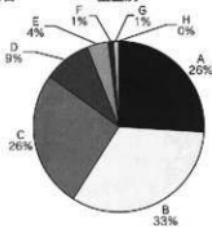
第15図 遺構実測図(2)

表3 IV・V層出土石器内訳表

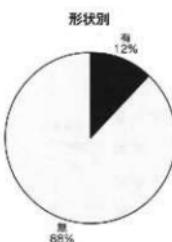
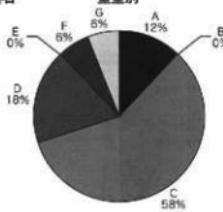
	帖地型 石鏃	打製 石鏃	削器	石匙	二次加 工剥片	微細剥離 ある剥片	剥片・ チップ	石核	
流紋岩系									
肥薩地域系黒曜石		1		1		3	24	3	32
西北九州系黒曜石							2		2
姫島産黒曜石							9		9
未分析黒曜石							5		5
チャート		1			1		3		3
瑪瑙	1						2	2	6
多久産サスカイト	1	1		1					1
金山産サスカイト			1						3
合計	2	3	1	1	2	3	45	5	62

表4 集石構造、IV・V層出土石器属性表

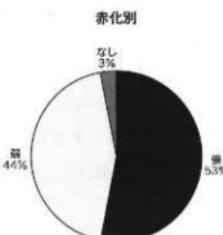
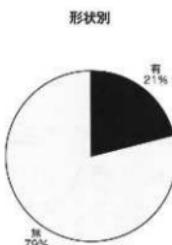
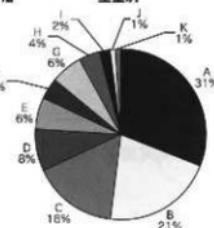
1号集石



2号集石



IV・V層



碟重量 A···~50g, B···51~100g, C···101~200g, D···201~300g, E···301~400g, F···401~500g,
G···501~750g, H···751~1,000g, I···1,001~1,500g, J···1,501~2,000g, K···2,000g~

1号集石

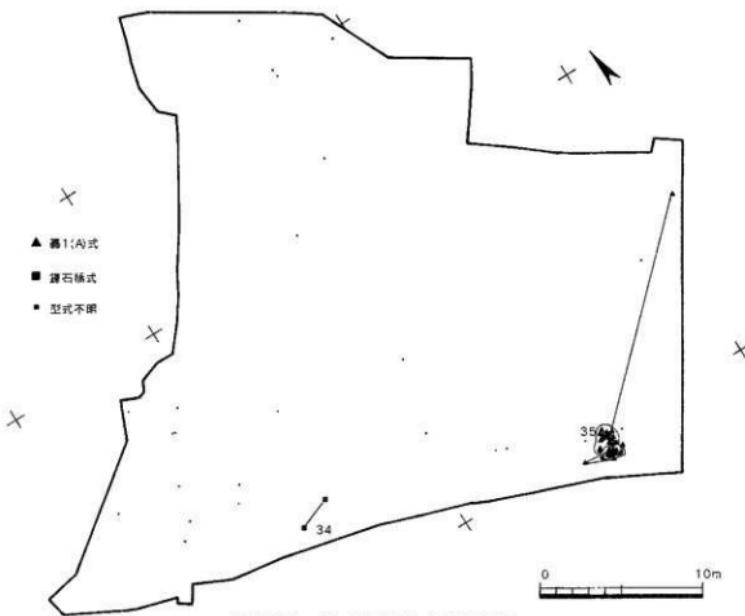
調査区北側微高地部の南向き坂斜面でV層上面から検出された。調査区端にかかり、遺構の一部は確認できなかった。平面形状は長軸 $1.2\text{m} + \alpha$ 、短軸 1.1m の橢円形である。東側へ下り傾斜している。構成砾の99%が砂岩砾である。総重量が $49,891\text{g}$ 、434点の砾で構成される。完形砾が24点確認された。93%の砾に赤化が見られた。砾の重量は 200g まで85%を占める。接合作業の結果、152点59個体が集石内接合し、1個体が完形砾となった。また、2号集石と2点、IV b層と1点、2号集石及びIV b層と2点が接合した。

2号集石

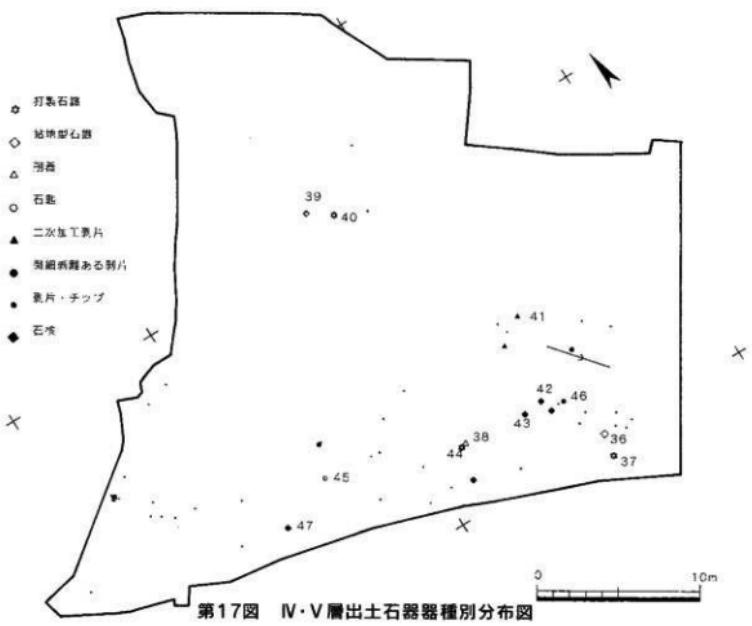
1号集石に隣接して検出された。平面形状は長軸 0.4m 、短軸 0.3m の橢円形を呈する。すべて砂岩砾で、総重量が $3,244\text{g}$ 、17点の砾で構成される。このうち2点が完形砾である。89%の砾に赤化が見られた。砾の重量は、 $101\sim 200\text{g}$ が最も多く、 50g 以下、 $401\sim 750\text{g}$ が数点である。接合作業の結果は、集石内で4点2個体、1号集石と2点、1号集石及びIV b層と1点が出土した。

散砾

全体で540点出土し、総重量は $147,232\text{g}$ である。このうち、95%が砂岩であった。重量別出土状況を見ると、 50g 以下が最も多く167点、 100g まで半数を超える。重量が重くなるほど、点数は徐々に減少するが、 $501\text{g}\sim 750\text{g}$ は若干多い。砾の赤化の有無については97%が赤化が認められた。完形砾は114点あった。破碎砾の接合を試みた。接合作業は、調査区北側の微高地状の範囲と、西～南側の低い範囲とで分けてを行い、微高地状の範囲は1号集石・2号集石との接合も試みた。



第16図 IV・V層出土土器分布図



遺物

土器

2号土坑出土土器

33は縄文土器脛部片である。

2条の連続刻目が施された隆帯が貼り付けられ、その下位に波状の貝殻復線文が施文される。

苦浜式である。

包含層IV層出土土器

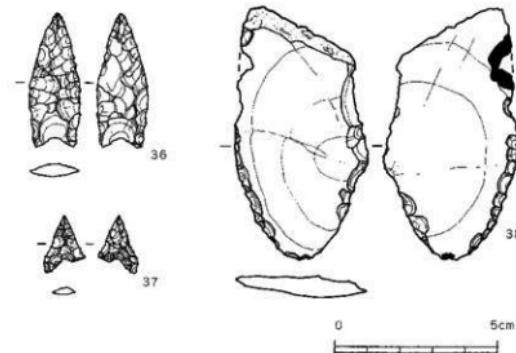
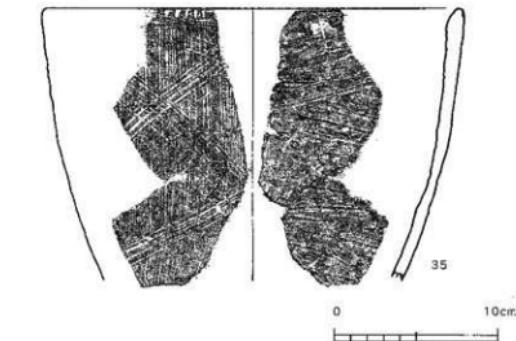
34は口縁部片である。口唇部外端には連続刻口が施され、脇部は綾衫状の条痕文である。鍵石橋式と考えられる。

35は口縁部から脇部にかけて残存する。口唇部外担に連続刻目が施され、脇部は縱方向・格子状に貝殻条痕文が施文される。最後に口縁部に横方向の貝殻条痕文が施される。広義の轟1式で、来畠光博氏のいう轟A式に該当する。

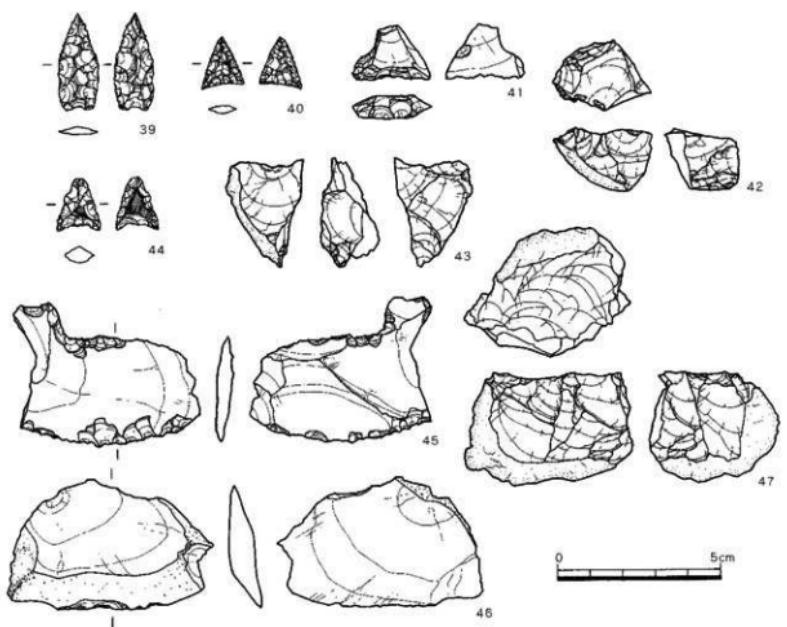
石器

全体で62点出土した。器種構成は、打製石鏃5点(内2点は帖地型石鏃)、石匙1点、削器1点、二次加工剥片2点、微細剥離ある剥片3点、剥片・チップ45点、石核5点である。

石材別にみると、多久産サスカイト3点、金山産サスカイト1点、瑪瑙1点、チャート6点、流紋岩系製品32点、肥薩地域系黒曜石2点、西北九州系黒曜石9点、姫島産黒曜石5点、黒曜石チップ(产地分析不能)3点



第19図 IV・V層出土遺物実測図(1)



第20図 IV・V層出土遺物実測図(2)

である。このうち黒耀石製品はすべて剥片・チップであった。

多久産サヌカイト製品

36・37は打製石器である。36は帖地型石器。

金山産サヌカイト製品

38は削器である。横長剥片を横位に利用する。両側縁と下縁部に二次加工が施される。上面は礫面である。

瑪瑙製品

39は帖地型石器である。

チャート製品

40は、打製石器である。41は二次加工剥片で、素材剥片の打点は欠損している。下面と左側面に腹面から背面に向て二次加工が施される。42・43は打面転移が頻繁に繰り返される石核である。いずれも礫面が残存しており、原石は比較的小型のものと推定できる。

流紋岩系製品

44は打製石器である。45は石匙である。表裏両面から二次加工が施される。46は微細剥離ある剥片である。47は石核である。非常に粗悪な石材が用いられる。上面を打面とし、表面及び右側縁に連続的な剥片剥離が施される。

第4節 III層の調査

III層はアカホヤ火山灰層及びアカホヤ火山灰の二次堆積層である。地形は、北側微高地部は波線部がIII層残存範囲であり南へ下り傾斜していたと考えられる。南西側は中央が落ち込む谷地形を呈し、南側へ下り傾斜する。縄文時代後期・晩期の遺物群と、古墳時代の遺物が出土した。いずれの時期の構造も確認されなかった。

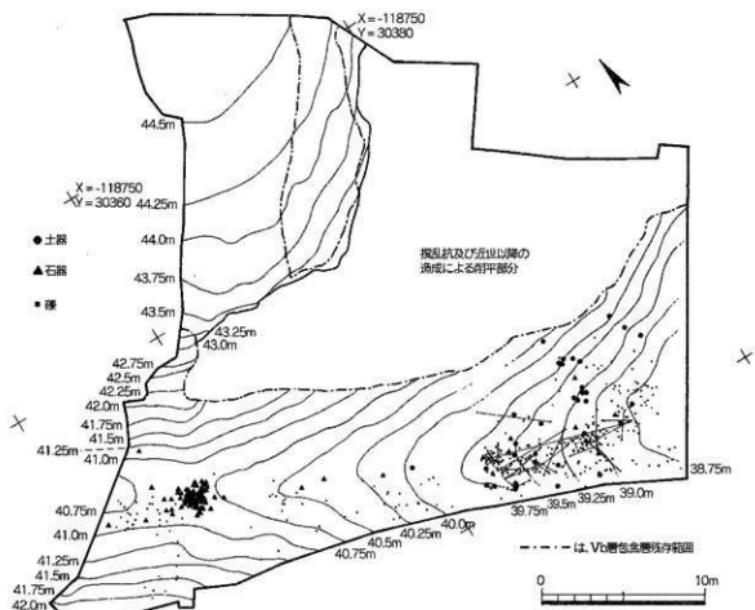
縄文時代の調査

分布状況

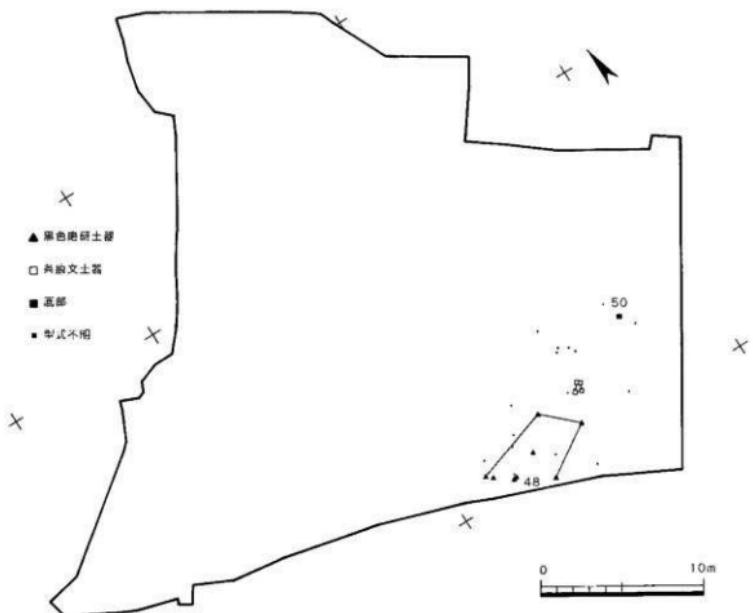
土器は、調査区南側斜面でまとまって出土した。石器は調査区西～南側斜面で出土した。調査区西側の石器集中部では、姫島系黒曜石製打製石器のほか、チャート製チップ、肥薩地域系黒曜石チップが出土している。石器製作の可能性も検討したが、石材が多様なこと、遺跡の谷部に当たることなどから、周囲からの流れ込みの可能性が高い。砾は南西の谷部でのみ出土した。

散礫

全体で428点出土し、総重量は77,040gである。94%は砂岩である。重量別出土状況を見ると、50g以下が最も多く、181点を数え、2Kg以上が4点である。砾の赤化の有無については、5点以外すべて赤化が認められた。完形砾は、55点であった。破碎砾の接合をIII層全体で試みた。



第21図 III層縄文時代出土遺物分布図



第22図 III層出土縄文土器分布図

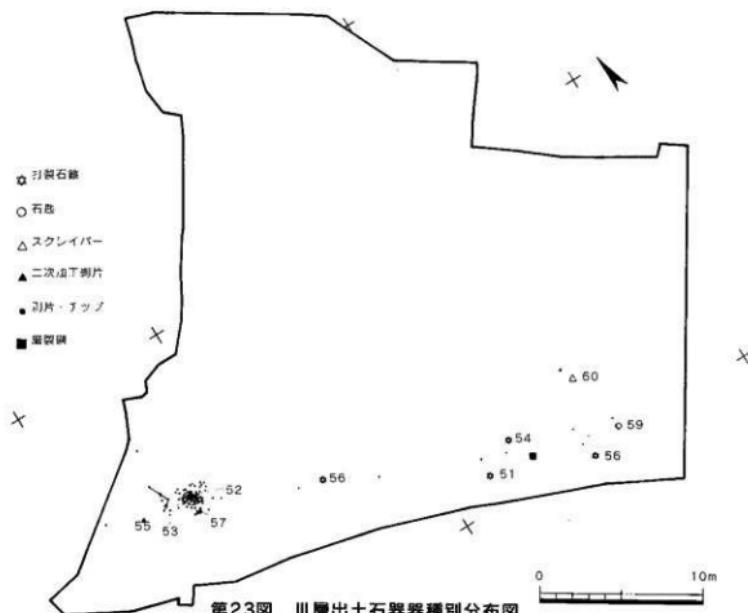
表5 III層出土石器内訳表

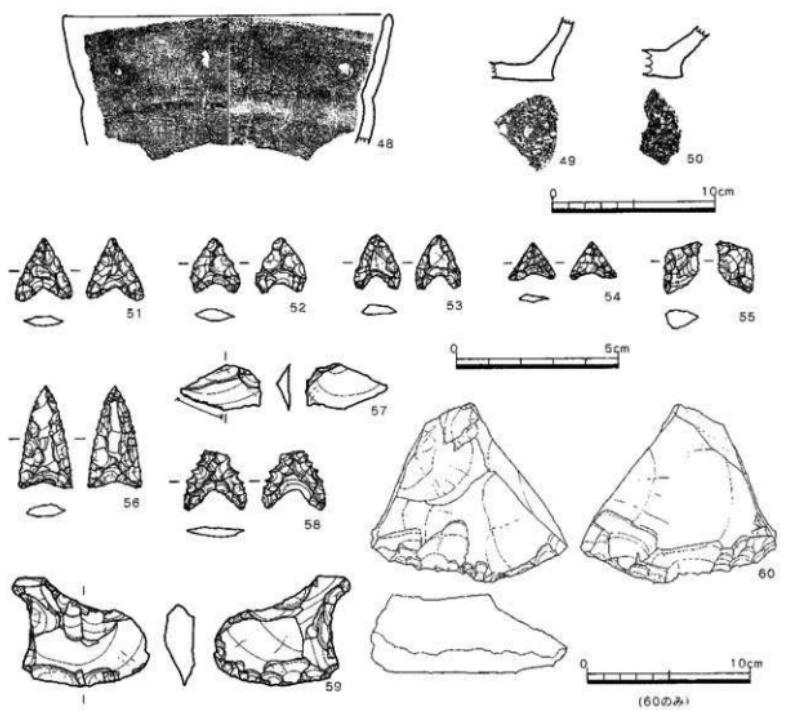
	打製 石器	石匙	スクレイ バー	二次加工 削片	剥片・ チップ	磨製 石器片	合計
流紋岩系	1				7	1	9
肥薩地域系黒曜石				3	13		16
姫島産黒曜石	4				1		5
未分析黒曜石					48		48
チャート	1	1		1	50		53
瑪瑙					3		3
多久産サスカイト				1	4		5
未分析サスカイト					1		1
砂岩			1		2		3
合計	6	1	1	5	129	1	143

土器

48は、内外面共に丁寧なナデが施される。頭部で屈曲し、口縁部の立ち上がりはやや内済する。縄文時代晩期黒色磨研土器である。

49-50は縄文土器の底部である。450は底面にアジロ彫みの繊物圧痕が認められる。彫み方は不明。





第25図 III層出土遺物実測図(縄文時代)

石器

全体で143点が出土し、器種構成は、打製石器6点、石匙1点、スクレイパー1点、二次加工剥片5点、剥片・チップ129点、磨製石器片1点である。石材別にみると、姫島産黒耀石5点、肥薩地域系黒耀石16点、黒耀石チップ48点、流紋岩系9点、多久産サスカイト5点、サスカイトチップ1点、チャート53点、瑪瑙3点、砂岩3点である。このうち瑪瑙は剥片のみの出土であった。

姫島産黒耀石製品

51～54は打製石器である。

肥薩地域系黒耀石製品

55は二次加工剥片である。表裏両面から二次加工が施される。上面は折損。

流紋岩系製品

56は打製石器である。

多久産サスカイト製品

57は二次加工剥片である。横長剥片を素材とし、最終剥離面の打面付近に背面側から二次加工が

加えられた後、腹面側から二次加工が施される。下縁部左に微細刻痕痕が認められる。

チャート製品

58は打製石器である。59は石器である。表裏両面から二次加工が施される。

砂岩製品

60は大型のスクレイパーである。下縁部に表裏両面から二次加工が施される。

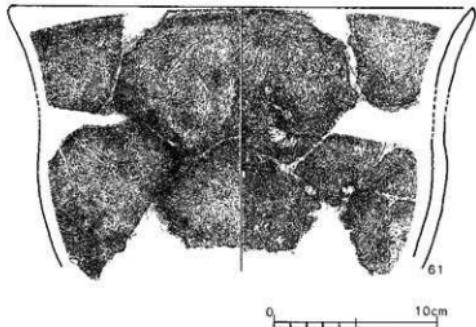
古墳時代の調査

分布状況

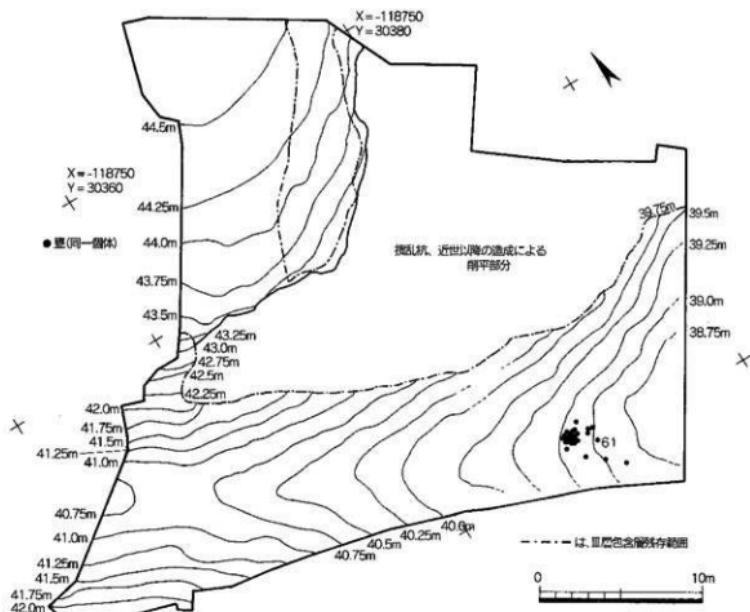
調査区南側の谷部で当該期の土器が出土した。接合作業の結果、同一個体と判明した。

土器

61は甕である。頸部で緩やかに屈曲し、口縁部はやや外反する。

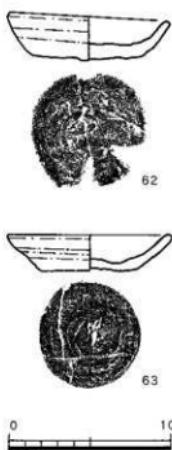


第27図 III層出土遺物実測図(古墳時代)



第26図 III層古墳時代出土遺物分布図

第5節 II層の調査



II層黒褐色土層が文化層である。包含層残存状況は悪く、南側の斜面部のみに確認された。旧地形の復元は困難である。遺物は、調査区南端で集中して見られた。碟は65点出土し、総重量は19,886gである。94%が砂岩である。碟が他層に比べ、出土点数が少ない。古代の包含層である。

遺物

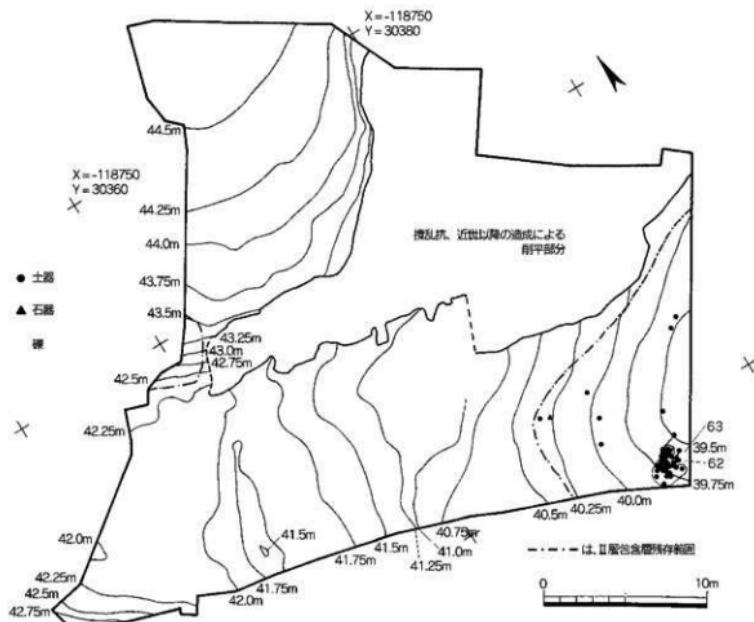
遺物は土器器皿の他、甕や壺の小片が数点出土した。

土器

62・63は土師器皿である。62は、器壁がやや厚く、丸みを持って内湾して立ち上がる。回転ナデで整形し、窓切りによって切り離される。63は、62に比べ器底が薄く、やや反り気味に立ち上がる。

回転ナデで整形し、窓切りによって切り離される。

第29図 II層出土遺物実測図



第28図 II層出土遺物分布図

表6 土器観察表

造物 標 番号	開版 番号	出土 地点	器種	法 帶(cm) 目録 底径	文様・調査		色 調	胎 土	備 考	
					外 面	内 面				
33 19	2号土坑	深部		—	②状の進化期山鹿型 ③紋様の貞豊縁文	⑤ナテ	外) に赤い斑模(10YR 7/4) 内) に赤い斑模(10YR 7/4)	赤～2.5の白色、黒色、 透明、赤褐色を含む。		
34 19	5	Na層	深部	—	①外端部に進化期目 ②轉移状の垂直縁文	④横方向の目波条痕	外) に赤い斑模(7.5YR 6/4) 内) に赤い斑模(7.5YR 6/4)	赤～1.5の白色、黒色、 透明を含む。		
35 19	4	Na層	深部	—	①外端部に進化期目 ②轉移状の垂直縁文 ③横・斜方向の目波条痕文	⑤横・斜方向の目波条痕	外) に赤い斑模(7.5YR 5/3) 内) に赤い斑模(7.5YR 5/3)	黄緑な白色、透明を 含む。		
48 25	6	Ⅲ層	深部	20.3	①②③丁寧なナテ	①②③丁寧なナテ	外) に赤い斑模(7.5YR 6/4) 内) に赤い斑模(7.5YR 6/4)	細緻な白色、黑色、透明 の組合。		
49 25	—	Ⅲ層	底部	—	③ナテ ④焼失により不明	⑤ナテ	外) に赤い斑模(10YR 7/4) 内) に赤い斑模(10YR 7/4)	赤～2.5の白色、黒色、 透明を含む。		
50 25	—	Ⅲ層	底部	—	③ナテ ④アラカリ	⑤ナテ	外) に赤い斑模(7.5YR 7/4) 内) に赤い斑模(10YR 7/4)	赤～1.5の白色、黒色、 透明、赤褐色を含む。		
61 27	4	Ⅲ層	表	28.5	—	①②③ナテ	①②③ナテ	外) 淡黄褐色(10YR 8/3) 内) 淡黄褐色(2.5YR 8/3)	赤～2.5の黄色、赤褐色、 黑色、灰色を含む。	
62 29	6	Ⅲ層	Ⅲ	10.0	7.0	①②③回転ナテ ④アラカリ	①②③回転ナテ	外) 淡黄褐色(10YR 8/3) 内) 淡黄褐色(10YR 8/3)	赤～0.5の褐色を含む。	
63 29	6	Ⅲ層	Ⅲ	10.1	6.0	①②③回転ナテ ④ヘラ切り	①②③回転ナテ	外) 橙(5YR 7/6) 内) 紅(5YR 7/6)	赤～1.5の黒褐色、2～ 5.5の小混含。	

表7 石材分類表

	石 材 名	石 材 記 号	特 徴
流 紋 岩 系	ホルンフェルス類	AE	黒色緻密で表面なめらか、0.5mm以下の孔を有するものが多い。
		I	Iに似る。つやなし。
	流紋岩類	AA	Iの模様有りの物。縞・斑点・模様などに程度の差あり。
		K	粒子が粗く境が不明瞭な雲状白色風化あり。
	Z	ホルンフェルス化。細脈あり。	
	瑪瑙		白色地に黒色、赤色部分を有するものもある。
	黒耀石	B	西北九州産(占里、中町、淀姫)、肥薩地域系(内屋敷UT遺物群、桑ノ木津留、日東)、姫島産がある。
	サスカイト	S	多久産、金山東産がある。
	チャート	C	半透明、黒色のものがある。
	頁岩	E	
	砂岩	G	

*流紋岩類・ホルンフェルス類については、バラエティーが豊富であり、同定が困難なものも含まれている。
今後さらに検討が必要なため、細分した諸特徴を記した。なお本文中では一括して流紋岩系としている。

第Ⅲ章 自然科学分析

第1節 脱畔遺跡出土の黒耀石、サスカイト製造物の原材産地分析

桑野 哲男

(京都大学原子炉実験所)

はじめに

石器石材の産地を自然科学的な手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると云う目的で、蛍光X線分析法によりサスカイトおよび黒耀石遺物の石材産地推定を行なっている^{1,2,3}。石材移動を証明するには必要条件と十分条件を満たす必要がある。地質時代に自然の力で移動した岩石の出発露頭を元素分析で求めるとき、移動原石と露頭原石の組成が一致すれば必要条件を満たし、その露頭からの流れたルートを地形学などで証明できれば、他の露頭から原石が流れて来ないことが証明されて、十分条件を満たし、ただ一ヵ所の一致する露頭産地の調査のみで移動原石の産地が特定できる。遺物の産地分析では「石器とある産地の原石の成分が一致したからと言って、そこの産地のものと言いかねることは、他の産地にも一致する可能性が推測されるからで、しかし一致しなかった場合そこの産地のものでないと言いかれる。」が大原則である。考古学では、人工作品の様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの入手が加わった調合素材があり一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致すると云うことは、古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する重要な意味をもつ結果である。石器の様式による分類ではなく、自然の法則で決定した石材の元素組成を指標にした分類では、例えば石材産地が遺跡から近い、移動キャンプ地のルート上に位置する、産地地方との交流を示す土器が出土しているなどを十分条件の代用にすると産地分析は中途半端な結果となり、遠距離伝播した石材を近くの産地と誤判定する可能性がある。人が移動させた石器の元素組成とA産地原石の組成が一致し、必要条件を満足しても、原材産地と出土遺跡の間に地質的関連性がないため、十分条件の移動ルートを自然の法則に従って地形学で証明できず、その石器原材がA産地の原石と決定することができない。従って、石器原材と産地原石が一致したことが、直ちに考古学の資料とならない、確かにA産地との交流で伝播した可能性は否定できなくなつたが、B、C、Dの産地でないとの証拠がないために、△産地だと言いかねない。B産地と一致しなかった場合、結果は考古学の資料として非常に有用である。それは石器に関してはB産地と交流がなかったと言いかれる。ここで、十分条件として、可能な限り地球上の全ての原産地(A、B、C、D・・・)の原石群と比較して、A産地以外の産地とは一致しないことを十分条件として証明すれば、石器がA産地の原石と決定することができる。この十分条件を肉眼観察で求めることは分類基準が混乱し不可能であると思われる。また、自然科学的分析を用いても、全ての産地が区別できるかは、それそれが使用している産地分析法によって、それぞれ異なり実際にやってみなければ分からぬ。産地分析の結果の信頼性は何ヶ所の原材産地の原石と客観的に比較して得られたかにより、比較した産地が少なければ、信頼性の低い結果と言える。黒耀石、サスカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純

物として含有される微量元素組成には異同があると考えられるため、微量元素を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに數十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して、各平均値からの離れ具合（マハラノビスの距離）を求める。次に、古代人が採取した原石産出地点と現代人が分析のために採取した原石産出地と異なる地点の可能性は十分に考えられる。従って、分析した有限個の原石から産地全体の無限の個数の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングのT₂乗検定を行う。この検定を全ての産地について行い、ある原石遺物原材と同じ成分組成の原石はA産地では10個中に一個みられ、B産地では一万個中に一個、C産地では百万個中に一個、D産地では・・・一個と各産地毎に求められるような、客観的な検定結果からA産地の原石を使用した可能性が高いと同定する。即ち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。今回分析した遺物は宮崎県東諸県郡高岡町に位置する駄原遺跡出土の黒耀石製遺物39個およびサスカイト製遺物7個の合計46個について産地分析の結果が得られたので報告する。

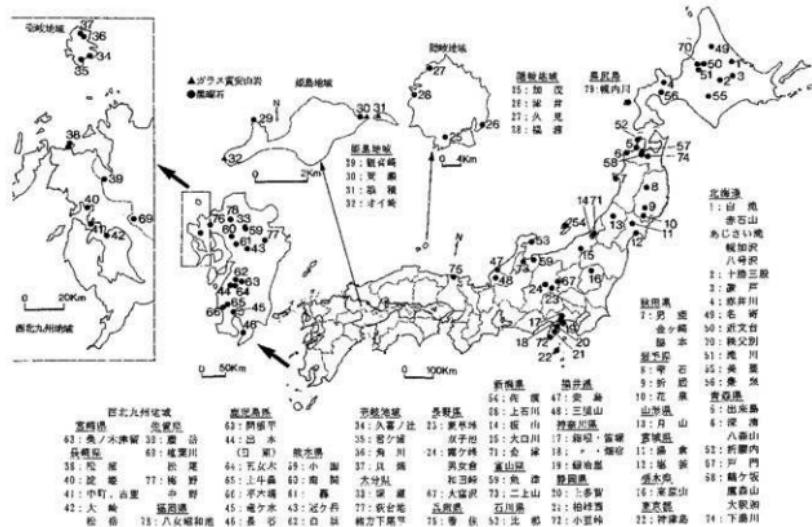
2 黒耀石、安山岩（サスカイトなど）原石の分析

黒耀石、サスカイト両原石の自然面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。

黒耀石原石

黒耀石は、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrの比量を産地を区別する指標をしてそれぞれ用いる。黒耀石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州、の各地に分布する。調査を終えた原産地を図30に示す。黒耀石原産地のほとんどすべてがつくされ、元素組成によってこれら原石を分類して表1に示す。この原石群に原石産地が不明の遺物で作った遺物群を加えると263個の原石群になる。佐賀県の腰岳地域および大分県の姫島地域の觀音崎、両瀬の両地区は黒耀石の有名な原産地で、姫島地域ではガラス質安山岩もみられ、これについても分析を行なった。隱岐島、若狭島、青森県、和田岬の一部の黒耀石には、Srの含有量が非常に少なく、この特徴が産地分析を行う際に他の原産地と区別する、有用な指標となっている。西北九州地域の原産地で採取された原石は、相互に組成が似た原石がみられる（表9）。西北九州地域で似た組成を示す黒耀石の原石群は、腰岳、古里第一、松浦第一の各群（淀姫系と仮称する）および淀姫、中町第二、古里第三、松浦第四の各群（淀姫系と仮称する）などである。淀姫産原石の中で中町第一群に一致する原石は12%個で、一部は淀姫群に重なるが中町第一群に一致する遺物は中町系と分類した。また、古里第二群原石と肉眼的および成分的に似た原石は嬉野町椎葉川露頭で多量に採取でき、この原石は姫島産乳灰色黒耀石と同色調をしているが、組成によって姫島産の黒耀石と容易に区別できる。もし似た組成の原石で遺物が作られたとき、この遺物は複数の原産地に帰属され原石産地を特定できない場合がある。たとえ遺物の原石産地がこれら腰岳系、淀姫系の原石群の中の一群および古里第二群のみ



第30図 黒耀石原産地



第31図 サヌカイト及びサヌカイト様岩石の原産地

に帰属されても、この遺物の原石産地は巣岳系、淀姫系および古甲第二群の原石を産出する複数の地点を考えなければならない。角礫の黒曜石の原産地は巣岳および淀姫で、円礫は松浦（牛田、大石）、中町、古甲（第二群は角礫）の各産地で産出していることから、似た組成の原石産地の区別は遺物の自然面から円礫か角礫かを判断すれば原石産地の判定に有用な情報となる。旧石器の遺物の組成に一致する原石を産出する川棚町大崎産地から北方4kmに位置する松岳産地があるが、現在、露頭からは8mm程度の小礫しか採取できない。また、佐賀県多久のサスカイト原産地からは黒曜石の原石も採取され梅野群を作った。九州中部地域の塚瀬と小国の中原産地は隣接し、黒曜石の生成マグマは同質と推測され両産地は区別できない。また、熊本県の南関、轟、冠ヶ岳の各産地の原石はローム化した阿蘇の火碎流の層の中に含まれる最大で親指大の黒曜石で、非常に広範囲な地域から採取される原石で、福岡県八女市の昭和池からも同質の黒曜石が採取され昭和池群を作った。従って南関等の産地に同定された遺物の原材産地を局所的に特定できない。桑ノ木津留原産地の原石は元素組成によって2個の群に区別することができる。桑ノ木津留第1群は沿路切り通し面の露頭から採取できるが、桑ノ木津留第2群は転礫として採取でき、これら両者を肉眼的に区別はできない。また、間根ヶ平原産地では肉眼観察で淀姫黒曜石のような黒灰色不透明な黒曜石から桑ノ木津留に似た原石が採取され、これらについても原石群を確立し間根ヶ平原黒曜石を使用した遺物の産地分析を可能にした。遺物の産地分析によって桑ノ木津留第1群と第2群の使用頻度を遺跡毎に調査して比較することにより、遺跡相互で同じ比率であれば遺跡間の交易、交流が推測できるであろう。石炭様の黒曜石は大分県萩台地、熊本県鹿室坂、箱石岬、長谷岬、五ヶ瀬川の各産地および大柿産、鹿児島県の種脇町上牛鼻産および平木場産の黒曜石は似ていて、肉眼観察ではそれ区別が困難であるが、大半は元素組成で区別ができるが、上牛鼻、平木場産の両原石については各元素比が似ているため区別はできない。これは両黒曜石を作ったマグマは同じで地下深くにあり、このマグマが地殻の割れ目を通って上牛鼻および平木場地区に吹きだしたときには、両者の原石の組成は似ると推定できる。従って、産地分析で上牛鼻群または平木場群のどちらかに同定されても、遺物の原石産地は上牛鼻系として上牛鼻または平木場地区を考える必要がある。出水産原石組成と同じ原石は日東、八女木の各原産地から産出していてこれらは相互に区別できず日東系とした。竜ヶ水産原石は桜島の対岸の竜ヶ水地区の海岸および海岸の段丘面から採取される原石で元素組成で他の産地の黒曜石と容易に弁別できる。

サスカイト原石

サスカイトでは、K/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srの比量を指標として用いる。サスカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて50ヶ所の調査を終えている。図31にサスカイトの原産地の地点を示す。これらの原石を良質の原石を産出する産地および原石産地不明の遺物を元素組成で分類すると156個の原石群に分類でき、その結果を表10に示した。安山岩の原石産地の一部を簡単に記すと、香川県の坂山、高松市に位置する金山・五色台地域では、その中の多くの地点からは良質のサスカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数ヶの群に分かれる。近年、丸亀市の双子山の南嶺から産出するサスカイト原石で双子山群を確立し、またガラス質安山岩は細石器時代に使用された原材で普通寺市の大麻山南からも産出している。香川県内の石器原材の産地では金山・五色台地域のサスカイト原石を分類すると、

金山西群、金山東群、圓分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6個の群、城山群および双子山群に、またガラス質安山岩は金山奥池、雄山、神谷町南山地区で採取され、大麻山南産は大麻山南第一、二群の2群にそれぞれ分類されて区別が可能なことを明らかにした。これらガラス質安山岩は成分的に黒耀石に近く、また肉眼観察では下呂石に酷似するもの、西北九州産の中町、淀姫産黒耀石、大串、龜岳原石と酷似するものもみられ、風化した遺物ではこれら似た原材の肉眼での区別は困難と思われ。正確な原材产地の判定は分析が必要である。金山・五色台地域産のサスカイト原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すサスカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円錐状で採取され、大阪府和泉・岸和田産地の疊層、和歌山県梅原産地疊層から、金山・五色台地域の諸群の一部に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からもサスカイト原石が採取される。奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山の原石で二上山群を作った。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の疊層产地から6%の割合で採取される。中国山地のサスカイト产地として代表的な产地は山口、島根、広島の県境に位置する冠山地域で、冠山、鬼ヶ城の山腹には安山岩の露頭が、また山腹からは崖難角砾として転石として見られる。伴藏地区的冠高原スキー場一帯（冠高原地点と呼ぶ）から良質原石が採取でき、冠高原群および伴藏C、A群を作った。冠高原スキー場から南方の飯山地区的針山地点（飯山地点と呼ぶ）の原石で飯山群を作った。また、額原地区産出原石で冠山東群を作った。また、考古学者の間で石器原材として使用されたのではないかと話題に上る产地の一つの、山口県熊毛郡平生町産の安山岩原石を分析し平生群を作り、この原石を使用した石器か否かの判定ができるようにした。九州地域産地では佐賀県多久、老松山と隣の岡本、西有田、嬉野町では松尾、椎葉川などで良質の原石が採取できる。長崎県では大串、龜岳产地、川棚、福井制窯遺跡地域で産出する福井産原石、松浦半島産の牟田産原石、また、山下実氏発見の雲仙胸崎鼻産サスカイトと福岡県昭和池採取原石の群が整備され、この他原产地不明の遺物で作った遺物群などが調査されている。大串、龜岳产地、川棚、佐賀県多久、老松山と隣の岡本、西有田、嬉野町では松尾、椎葉川などで良質の原石が採取できる。これら原石と冠山地域産原石とは成分組成で区別できる。

3 結果と考察

遺跡から出土した黒耀石製石器、石片は風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。黒耀石製の石器で、水和層の影響を考慮するとすれば、軽い元素の分析ほど表面分析になるため、水和層の影響を受けやすいと考えられる。Ca/K、Ti/Kの両軸元素比量を除いて产地分析を行なった場合、また除かずに产地分析を行なった場合、いずれの場合にも同定される产地は同じである。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやや不確定を作り、遺物の石材产地の判定を誤るようなことはない。一方、安山岩製石器、石片は、風化のためサスカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なる元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なった。

今回分析した就畔遺跡出土の黒耀石、サスカイト製遺物の分析結果を表11-1、2に示した。石器

の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするために Rr/Zr の一変量だけを考えると、表II-1の試料番号94347番の遺物では Rr/Zr の値は1.133で、桑ノ木津留第1群の【平均値】±【標準偏差値】は、 1.080 ± 0.048 である。遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から 1.1σ 離れている。ところで桑ノ木津留第1群の原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から± 1.1σ のそれより大きいものが27個ある。すなわち、この遺物が、桑ノ木津留第1群の原石から作られていたと仮定しても、 1.1σ 以上離れる確率は27%であると言える。だから、桑ノ木津留第1群の平均値から 1.1σ しか離れていないときには、この遺物が桑ノ木津留第1群の原石から作られたものではないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を腰岳群に比較すると、腰岳群の平均値からの隔たりは、約 6σ である。これを確率の分布で表現すると、腰岳の産地の原石を探ってきて分析したとき、平均値から 6σ 以上離れている確率は、十万分の一であると言える。このように、十万个に一個しかないような原石をまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、腰岳産の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことと簡単にまとめて言うと、「この遺物は桑ノ木津留第1群に27%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから桑ノ木津留第1群原石が使用されていると同定され、さらに腰岳群に0.0001%の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%に満たないことがら腰岳産原石でないと同定される」。しかし、例え桑ノ木津留第1群と腰岳群の原石は成分が異なっていて遺物が一ヶ所の産地(桑ノ木津留第1群産地)と一致したからと言っても、分析している試料は原石でなく遺物で、さらに分析誤差が大きくなる不定形(非破壊分析)であることから、他の産地に一致しないとは言いきれない。同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地(桑ノ木津留第1群)に一致し必要条件を満たしたと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表8の263個すべての原石群について行ない、十分条件である低い確率で帰属された原石群を消していくことにより、はじめて桑ノ木津留第1群産地の石材のみが使用されていると判定される。実際は Rr/Zr といった唯一つの変量だけでなく、前述した8つの変量を取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とSr元素との間に相関があり、Caの量を計ればSrの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Sr量も一致するはずである。もしSr量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に屬していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計的手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT₂乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する^{1,2}。産地の同定結果は1個の遺物に対して、黒耀石製では263個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち、桑ノ木津留第1群産原石と判定された遺物について、台湾の台東山脈産原石、北朝鮮の会寧遺跡で使用された原石と同じ組成の原石とか、信州和田岬、施ヶ壁産の原石の可能性を考える必要がない結果で、高い確率で同定された産地のみの結果を表12に記入した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、小さな遺物試料によって原石試料と同じ測定精度で元素含有量を求めるには、測定時間を長くしなければならない。また、検出された元素であつ

ても、含有量の少ない元素では、得られた遺物の測定値には大きな誤差範囲が含まれ、原石群の元素組成のバラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。この場合には、原石産地（確率）の欄の確率値に替えて、マハラノビスの距離D2乗の値を記した。この遺物については、記入されたD2乗の値が原石群の中で最も小さなD2乗値で、この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低いが、そこの原石産地と考えてほゞ間違ないと判断されたものである。今回、分析した肱畔遺跡出土の黒耀石製、サスカイト製遺物の中で、分析番号94320番の遺物は、信頼限界の0.1%に達しているが、推定確率の低い理由は、（1）遺物が異常に風化し元素組成の変化が非常に激しい場合、（2）遺物の厚さが非常に薄いとき、特に遺物の平均厚さが1.5mm以下の薄い試料では、Mn/Zr、Fe/Zrの比値が大きく分析され、1mm厚でFe/Zr比は約15%程度大きく分析される。しかし、1mm厚であればRb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrについては分析誤差範囲で産地分析結果への影響は小さく、Mn/Zr、Fe/Zrの影響で推定確率は低くなるが原産地の同定は可能と思われる。この分析番号94320と94336番の剥片は小さいが、1mm以上の厚さがあり厚さの影響はない。しかし、分析面に少し自然風化層面があり、分析値に風化が影響した可能性が考えられる。風化の影響は推測であるが、風化層内のK元素が黒耀石表面に移動し濃縮し、マトリクス効果の自己吸収によるK元素蛍光X線の減衰が減少するために、K元素のピークが大きく観測される。従って、本米、内屋敷UT遺物群に同定されるべきが、比較的組成の似た桐木I5遺物群に同定された可能性も否定できない。また、内屋敷UT遺物群よりカリウムの含有量の少しい桐木I5遺物群は同じ未発見の産地の可能性も考えられる。また、分析番号94322番の遺物は、球果があり、球果の部分を除外して分析すると内屋敷UT遺物群（2%）に同定され、球果が少し入ると桑ノ木津留第2群（1%）に同定された。球果を除いて群を作っているために、内屋敷UT遺物群（2%）の同定結果を採用した。内屋敷UT遺物群と同時に同定されている富山県高岡市の二上山第1群の原石は非常に小さく、また産出量も少ないとから、遠距離伝播して肱畔遺跡で使用された可能性はないと推測した。分析番号94337番の遺物は、桑ノ木津留第2群に同時に同定されているが、多用されている内屋敷UT遺物群と判定した。分析番号94347番は桑ノ木津留第1群と同時に秩父別第1群に同定されているが、桑ノ木津留第1群との差は200倍以上で、判定結果として、桑ノ木津留産地に判定した。また、五女木群、日東群は区別できないが、さらに同時に白浜群に帰属され遺物は、帰属確率が3倍～87倍、五女木または日東群の方が高いことから、五女木・日東産と判定した。また、前述したように表9で示す西北九州地域産黒耀石群に帰属された遺物は、表9に従って複数の原石産地を推測する必要がある。たとえ遺物の原石産地が腰岳系、淀姫系の原石群の中の一群および古里第二群のみに帰属されても、この遺物の原石産地は腰岳系、淀姫系および古里第二群の原石を産出する複数の地点を考えなければならない。角礫の黒耀石の原産地は腰岳および淀姫で、円礫は松浦（牛田、大石）、中町、古里（第二群は角礫）の各産地で産出していることから、似た組成の原石産地の区別は遺物の自然面から円礫か角礫かを判断すれば原石産地の判定に役立つと思われる。分析番号94338、94339、94341番の遺物の自然面は円礫状であることから、針尾中町の中町第2群原石と判定した。また、自然面のない分析番号94340、94342、94343番も中町産地と判定した。分析番号94356番は自然面がなく、古里、松浦、腰岳産原石（腰岳系）の区別ができない。分析した黒耀石製造物39個の遺物の各産地別の使用頻度の中で最も多數使用された内屋敷UT遺物群が

38% (15個) で、次に姫島産が23% (9個) で、中町産が17% (6個) で、日東・五女木産が8% で、淀姫産と柳木15遺物群が5% (2個)、桑ノ木津留産と腰岳系が3% (1個) であった。一方、分析した安山岩製造物 (サスカイト) 7個は風化層で表面が白くなっているため、エアブラシをかけて風化層を取り除き新鮮面を出して分析を行った。多久産と判定した遺物の中で分析番号94362番の遺物は大原野遺跡の大原野34遺物群により高い確率で一致している。これは、大原野34遺物群が多久第2群に信頼限界ギリギリの確率で同定された、多久第2群に似た組成の遺物で作られた群であるため、遺物を同定したとき多久第2群以外に大原野34遺物群にも同時期属する遺物があらわれる。多久地域を含めた近隣地域に大原野34遺物群に一致する原石産地が存在すると推測している。また、分析番号94363番の削器は金山東岸原石と同定された。金山東岸サスカイトは板状に削れるために薄い削器の制作に適した原材で、筑波遺跡の住人は400Kmも離れた産地の原材を入手し、同時に香川県金山産地の生活情報も入手していたと思われる。産地分析で使用頻度の高い原石産地とは、交易、交流が活発であったとする、筑波遺跡の黒曜石に関する交流で、伝播ルートを推測すると、天草灘を通る可能性が推測できる西北九州産黒曜石は中町、淀姫、腰岳系の各産地をまとめると21.4% (8個) で、安山岩製造物の多久地域からの伝播を入れると西北九州地域との交流が頻繁であった可能性が推測され、また、日向灘沿いを通る可能性のある九州北東部からは姫島産が23% (9個) 伝播していることが判明された。本遺跡が九州西北部と九州東北部の情報を入手し、逆に筑波遺跡の情報が九州北西、東部に原石の伝播によって伝達されていたと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

参考文献

- 1) 菊村哲男・東村武信(1975). 蛍光X線分析法によるサスカイト石器の原産地推定(I). 考古学と自然科学, 8:61-69
- 2) 菊村哲男・東村武信・諫木義昌(1977),(1978). 蛍光X線分析法によるサスカイト石器の原産地推定(II),(III). 考古学と自然科学, 10,11:53-81;33-47
- 3) 菊村哲男・東村武信(1983). 石器原材の产地分析. 考古学と自然科学, 16:59-89
- 4) 東村武信(1976). 产地推定における統計的手法. 考古学と自然科学, 9:77-90
- 5) 東村武信(1980). 考古学と物理化学. 学生社.

表10 九州西北地域原産地採取原石が各原石群に同定されている割合の百分率 (%)

原石群	九州西北地域原産地地区名 (原石個数)						
	腰岳 (26)	淀姫 (44)	古里 陣地 (66)	古里 海岸 (21)	中町 (44)	牟田 (46)	大石 (39)
腰岳群	100		37			24	33
淀姫群		100					
古里第一群	100		63	5		43	51
第二群			11	57	2		
第三群			95	25	33	50	26
中町第一群			12	14	24	68	18
第二群				98	14	24	57
松浦第一群			88		32		33
第二群			96		51	5	2
第三群				57	24	33	54
第四群				93	17	24	52
椎葉川群					9	48	2
							100

注: 同定確率を1%以上に設定した。古里陣地で採取された原石1個(No.6)判定例一古里第一群(62%), 松浦第一群(37%), 松浦第二群(23%), 腰岳(21%)が1%以上で同定され残りの223個の原石群に対する1%以下の同定確率であった。古里陣地(66個)の腰岳群37%は66個の中の37%個は腰岳群に1%以上の同定確率で同定される。

第IV章 まとめ

今回の調査では、後期旧石器時代後半から古代までの文化層が確認された。当初予想された、近接する国指定史跡移佐城跡との関連遺構は確認されなかった。

1 後期旧石器時代の腕畔遺跡(VI・VII・VIII層)

石器群は、ナイフ形石器・スクレイバー・搔器などが出土した。石核5・7は上面に打面が設定され、表面と側面に剥片剥離が施される。8は石核左側面からの剥離によって打面が作出され、全周に剥片剥離が施される。船野型細石刃核プランクの可能性が高い。9は上面を打面として剥片剥離が行われる。作業面は表面のみであるが、8と同様、船野型細石刃核に関連するものか。接合資料は41点12個体が確認された。そのうち石核を含む資料が4個体ある。それらは、打面転移が繰り返され、縦長剥片が剥離される。石核8を船野型細石刃核プランクとすれば、ナイフ形石器文化期と、少なくとも2期の文化期が存在したことが考えられる。

2 織文時代早期の腕畔遺跡(IV・V層)

調査区北側微高地部では、土坑4基と集石遺構2箇が検出された。1号土坑はVI層上面で検出されており、最も古い所産と考えられる。平面形状は長楕円形、床面は長方形を呈し長軸上に小ピットを2つ有する。陥入穴であろう。2号・3号土坑は本体の掘り込み面は削平されている可能性が高く、出土遺物・理上の観察から早期の所産の可能性が高いが正確な時期は不明である。底面ピットを有する陥入穴の可能性が高い。4号土坑は平面形状は長方形の比較的浅い土坑である。集石遺構はV層上面で検出された。集石内の礫は、集石間、包含層との接合が認められる。土器はIVa層を中心に見られ、34は鎌石柄式、35は轟A式であり、早期末葉に比定される。石器はIVa層からVc層まで確認されており細分される可能性が高い。出土状況から、少なくとも2つの文化層が存在すると想定される。一期は、Vb層の帖地型石器を含む石器群、もう一期は、IVa層を中心とする土器を含む早期末葉の遺物群である。

3 織文時代後晩期の腕畔遺跡(Ⅲ層)

織文時代後期・晩期の遺物が出土した南西側は中央が落ち込む谷地形を呈する。土器は後期土器の底部と思われる編物圧痕が確認されたもの、晩期黒色磨研系の土器が出土した。石器は、打製石器、石匙、二次加工剥片などが出土している。石材も多様である。石器の詳細な該当時期は不明である。

4 古墳時代の腕畔遺跡(Ⅲ層)

調査区南側の谷部で土師器甕1個体が出土した。6世紀後半の所産か。遺構は検出されていない。生活空間としての利用は希薄であり、周辺に当時代の遺跡が存在する可能性が考えられる。

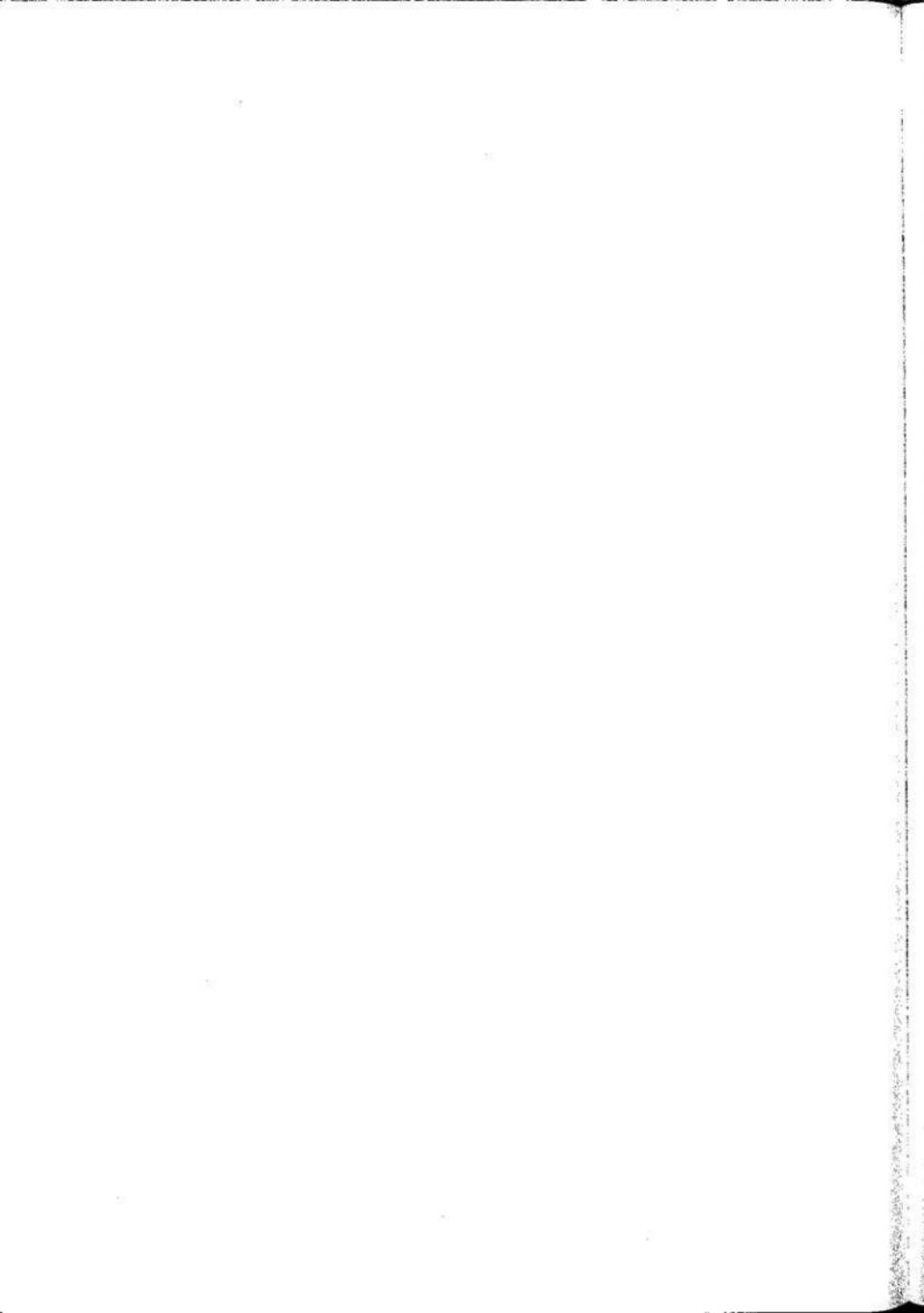
5 古代の腕畔遺跡(Ⅱ層)

後世の削平により旧地形の復元は困難である。土師器甕・甕・壺が出土した包含層残存部は谷部に当たるために流れ込みの可能性も高い。町内では、高野原遺跡や永迫第2遺跡といった段丘状に立地し、古代の遺物やピット群をわずかに有する遺跡が散見される。

6 現在の腕畔遺跡

今は、数十メートルにわたる法面を擁する農道が建設され、空中に消滅してしまった。

写 真 図 版



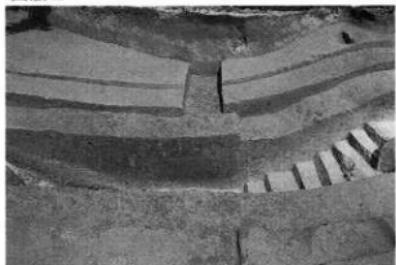


遺跡遺景（北から）



遺跡遺景（西から）

図版2



土層断面
1トレンチ谷部



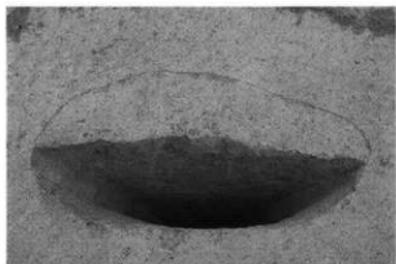
IV層 出土状況
谷部



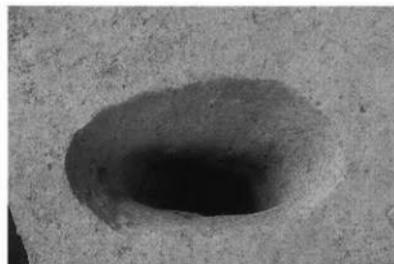
V層 出土状況
南北部



VII層 出土状況
微高地部



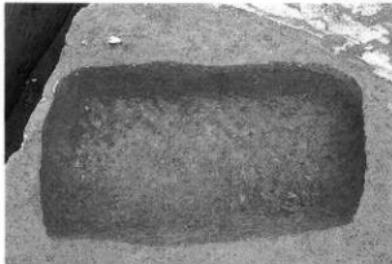
1号土抗
半裁



1号土抗
完掘



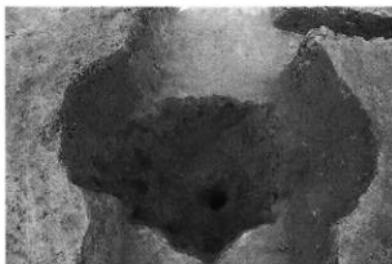
2号土抗
完掘



4号土抗
完掘



3号土抗
半裁



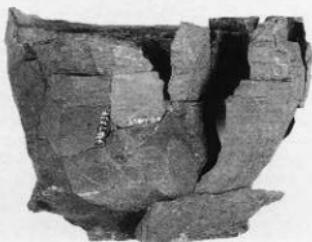
3号土抗
完掘



1号集石
一部は調査区外へと続く



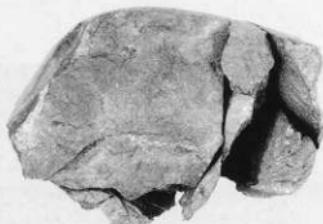
1号集石と2号集石



接合資料1表面



接合資料1右側面



接合資料1上面



接合資料1下面



接合資料2表面



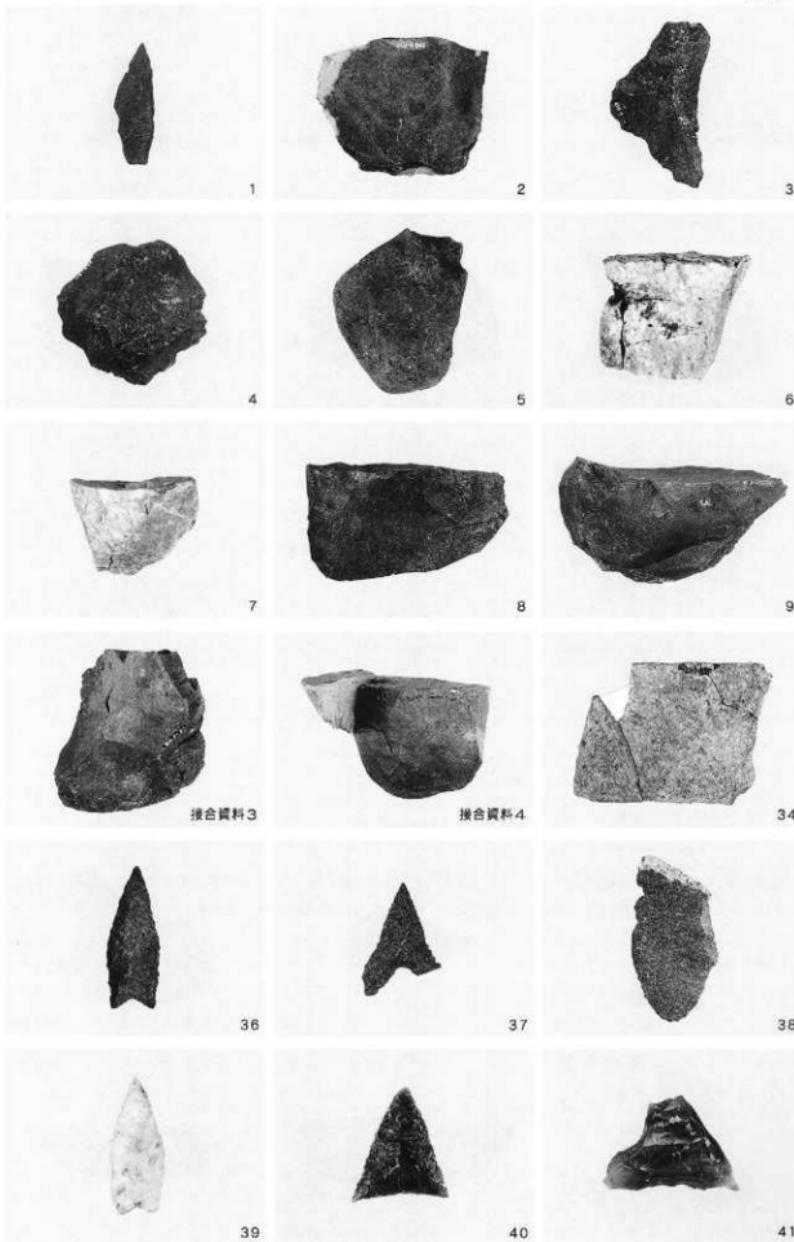
接合資料2上面



35



61



図版6



42



43



44



45



46



47



48



51



52



53



54



55



56



57



59



60



62



63

表14 報告書登録抄

フリガナ	ヒジクロイセキ
書名	就畔遺跡
圖書名	県営ふるさと農道緊急整備事業(小山田地区)に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	第5巻
シリーズ名	高岡町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第34集
編集者名	藤木晶子
発行機関	高岡町教育委員会
所在地	富崎県東諸県郡高岡町大字内山2887番地
発行年月日	2005年3月31日

収藏遺跡名	所 在 地	コード		緯度	経度	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
就畔遺跡	東諸県郡高岡町大字 小山田2287-2番地外	45-	338	31° 55' 42"	131° 19' 16"	2002.4.18 2002.9.10	812m ²	農道 整備
種 別 主 な 時 代 主 な 遺 構						主 な 遺 物		特記事項
後期旧石器時代 散布地 桶文時代早期						ナイフ形石器 縫穴状遺構 粘地型石器		

高岡町埋蔵文化財調査報告書第34集

耽畔遺跡

2005年3月

編集・発行 高岡町教育委員会
〒880-2292
富崎県東諸県郡高岡町大字内山2887
TEL. 0985-82-1111

印 刷 秀巧社印刷株式会社
〒815-0035
福岡県福岡市南区向野2-13-29
TEL. 092-541-5661